

岐 阜 大 学

留学生センター紀要

2016

岐阜大学留学生センター

# 岐阜大学留学生センター紀要

2016

巻頭言	森 田 晃 一 (留学生センター長)	1
-----	--------------------	---

## 論 文 編

### 【研究ノート】

言い方の違いを表現する際に現れる音声面の相違 —日本人と留学生の合同授業における会話作成課題から—	橋 本 慎 吾	3
現代日本語における接頭辞「お」の付く語の意味分類について	村 田 志 保	11

## 年 報 編 (2016年4月～2017年3月)

1. 日本語研修コース	23
2. 日本語・日本文化研修コース	37
3. 日本社会文化プログラム	40
4. 全学共通教育	42
5. 留学生指導	43
6. 留学生センター年間行事	54
7. 留学生センター交流ラウンジ	65

## 資 料

岐阜大学留学生数	68
----------	----

## 巻頭言

留学生センター長 森 田 晃 一

留学生センターのミッションは、外国人留学生に対する日本語・日本文化教育、日本人学生に対する国際理解教育、多文化交流機会の提供、外国人留学生受入・日本人学生派遣とその体制整備、県内自治体との連携事業等を行い、次世代の国際社会を担う人材を育成すること、加えて国際教育の充実及び向上のための調査研究と実践を推進し、共同教育研究施設として本学並びに地域社会の国際化に貢献することです。

具体的には、(1)中核的な業務である日本語研修コース（レベル別にA～Dクラスを展開）、(2)2017年度に17期を数える日本語・日本文化研修コース、(3)交換留学生のための半年ないしは1年の日本社会文化プログラム、(4)約30年の歴史を有するサマースクール（受入・派遣、2016年度からグローバル推進本部内で実施）、(5)日本語・日本事情だけでなく人文科学系科目も担当する全学共通教育、(6)修学・生活指導、(7)紀要・報告書の刊行、(8)その他（交流ラウンジ運営、日韓共同理工系学部留学生事業、特別講演会・フォーラム等の開催）に加え、日本人学生を対象とした留学相談、2016年度に新設された地域科学部国際教養コースへの科目提供等々を行っています。

このような多様化した業務を効率的・効果的に遂行するため、2017年3月、本センターは地域科学部・共通教育棟4階に全面移転しました。本センターとオープンラボラトリー（本センターがグローバル推進本部・地域科学部とともに大学に申請して許諾を得た施設）を含めると、同フロアで使用できる面積は600m<sup>2</sup>を超え、そこにセンター長室・教員研究室（5室）・非常勤講師室・教室（2室）・和室（1室、整備中）・交流ラウンジ等々を配置しています。従来から使用している本棟内の4教室を含めると、本センターを中核とした国際教育機能が本棟の建物内に集約することとなり、本学の国際交流の進展に対応できる環境が整いつつあります。

周知のように、2020年に向けて「留学生30万人計画」が進行中ですが、日本人学生の海外派遣も12万人の数値目標が示されています。これらの目標の達成はもとより、「地域に根ざした国際化」を実現するため、本学は2015年4月に「特別な組織」としてグローバル推進本部が設置しました。学長直属のこの組織では、国際・広報担当理事が本部長を務め、留学生センター長が副本部長として本部内の1部門である留学基盤教育推進部門長を兼務しています。また本センター教員全員が、部門のメンバーとして上記(4)に記したとおり、サマースクール（受入・派遣）事業等の活動を担っており、グローバル推進本部との協働が順次進んでいます。

上記のような事情に加え、留学生の就職を支援する日本語教育や、派遣学生対象の日本理解を深める文化教育も重視されつつあり、改めて日本語・日本文化教育の必要性・重要性が高まっています。新たに生起する学内外の要請に対して、本センターはどのように応えて行くのか、検討の時期を迎えています。

さて、1996年度の本センター設置当初から20年以上、教育研究そして運営に一方ならずご貢献くださった太田孝子教授が、2017年3月をもってめでたく定年での退職をお迎えになりました。

先生が恙無く定年をお迎えになられたこと、本センターに対する多大のご尽力に感謝の意を表し、この場を借りて心からお慶びと御礼を申し上げます。

本紀要は、研究ノート2編（橋本慎吾・村田志保）、年報と資料を構成内容としています。研究ノートをご執筆いただいた2名の先生方、年報と資料を取りまとめてくださった編集委員の皆さんに感謝申し上げます。

## 論文編

言い方の違いを表現する際に現れる音声面の相違

—日本人と留学生の合同授業における会話作成課題から—……………	橋本慎吾	3
現代日本語における接頭辞「お」の付く語の意味分類について……………	村田志保	11



# 言い方の違いを表現する際に現れる音声面の相違

—日本人と留学生の合同授業における会話作成課題から—

The Acoustic Difference between the Same Utterances Spoken by Japanese Learners to Express the Difference in Two Situations  
—Based on Making Conversation Task in the Class of Japanese Students and Foreign Students—

橋 本 慎 吾

## 要旨：

態度や感情のように様々な要因によって現れ方が異なる情報（パラ言語情報）の音声特徴を捉えるため、同じ言葉が異なる言い方になる2つの会話を作成し演じるという課題において、留学生が発した2つの同じ言葉にはどのような音声面の相違が見られるかを分析した。日本人学生と留学生が作成した2つの会話に含まれる「え、そうなんですか」という言葉を留学生が演じた際の高さ（基本周波数）と長さ（持続時間）について、2つの発話の差を取って分析した結果、一方の発話で高さが高くなっている場合、もう一方では持続時間が長くなっているといった、高さと長さに関連性のある相違が見られた。

## 1. 本稿の目的

### 1.1 パラ言語情報の教育に向けて

会話は音声を通して行なわれるため、言語習得を目的とする会話教育には音声面の教育も含まれる。特に、第二言語として学習する際には、母語の習得とは異なり、音声面での習得は難しいものとなっている。母語話者は、個々の会話における自然で適切な音声を使って、日常生活の中で会話を行なっているが、その音声は経験的に身につけたもので、どのようにすれば自然で適切な音声になるかを把握して音声を使っているわけではない。一方、学習者はその言語における経験がない、あるいは少ないため、何が適切な音声になるかについての知識がない。

会話音声伝える情報には、単音やアクセントのように、共通の記述方法を介すれば記述が可能な情報（言語情報）、そして、態度や感情のように様々な要因によって現れ方が異なる情報（パラ言語情報：Trager 1958）という二つの側面がある。言語情報にはアクセントのように規則性を有するものがあり、パターン練習が可能であると考えられる。一方、パラ言語情報にも型やパターンはあると言えるが、言語情報ほど一定ではない。また、会話は音声だけで行なわれるわけではない。表情、動作、相手との距離などの要素や、両者の関係、会話の場所、等の状況的要素によって会話は行なわれ、その要素が音声に反映するため、個々の会話の流れの中で音声の現れ方が異なる。つまり、パラ言語の型・パターンはいわゆる典型的な言い方の一つを表しているに過ぎない。

学習言語の音声実現は言語情報の実現であっても習得が困難な側面があり、また母語ではない言語を話すことは自分の言語ではないので意図や感情を表すことがそもそも難しい。しかし、自

然な会話を身につけることは語学学習の目的の一つであり、そのためには会話教育においては、言語情報だけでなく、パラ言語情報の側面についての学習も必要である。

## 1.2 演劇的アプローチ

パラ言語情報は言語情報と異なり、発話そのものだけで規定されるものではない。このようなパラ言語情報について考えたり練習したりする方法の一つとして、演劇的アプローチが挙げられる（橋本2003,2012）。演劇は「ある場面・文脈における適切な表現を繰り返し表現する」という側面があり、そのために演出家は演出を行ない、俳優は稽古を行なう。演劇的アプローチは、演劇が培ってきたものを語学教育に取り入れようとする試みである。

演劇的側面を取り入れた教育は、最近では国語教育などでも取り上げられている。例えば国語教科書に掲載されている「話す言葉は同じでも」（光村図書出版『小学校 国語 4年 上』p34-35）では、

ひとみ：今日はじめて二十五メートル泳げたよ

たかし：そう。それはよかったね

という会話を2つの絵で示し（図1参照）、次のように指示している。

「たかさんの返事で、ひとみさんは、それぞれどのような気持ちになると思いますか。ひとみさんとたかさんの役になり、動作をつけてやり取りをしてみましょう」（p34）



図1 「話す言葉は同じでも」の会話例

この2つの絵には、言語情報（会話の言葉）は示されているが、どのように音声実現するかについては何も示されていない。示されているのは二人の表情や顔の向きなどであり、母語話者は経験的知識から、言い方が変わることは想像ができるが、どのように音声実現するかには一つの正解が存在するわけではなく、実際に発話してみて初めて分かることが多い。いろいろな音声表現を試みることによって、適切な音声実現を捉えることができる。

こうした演劇的アプローチを取り入れた授業を、本学では日本人学生と留学生の合同授業で行っている。この合同授業は、日本人学生と留学生が日本語の会話について考えるというもので、日本人学生にとっては留学生と共に活動することによって経験的知識を客観的に考察することができ、留学生にとっては経験のない状況での日本語発話を日本人と共に試行することができる。本稿では、この授業での活動の一つを取り上げ、パラ言語情報の音声的現れ方について考察を試みるものである。

## 2. 同じ言葉を含む2つの会話：違いを表現する際に現れる音声面の相違

### 2.1 日本人と留学生の合同授業における課題

本学で行なっている「日本語口頭表現」の授業は、日本人学生と留学生が3～4人のグループを組んで様々な活動を行い、それらを通じて日本語や日本語会話について考えるものである。その活動の一つに、先述した「話す言葉は同じでも」のように、同じ言葉が入った2つの会話を作成して演じてみるという課題がある。

方法は2通りあり、①全てのグループで同じ言葉（例えば後述する「え、そうなんですか」）を含む2つの会話を作成する、②グループごとに一つ言葉を決めて、それを含む2つの会話を作成する、というものである<sup>1)</sup>。

先述の「話す言葉は同じでも」は会話が絵と文字で示されており、実際の音声情報は含まれていないが、母語話者であれば、経験的知識から2つの会話で言い方が異なることはわかる。同様に、「え、そうなんですか」の言い方が異なる場面や会話の流れを考えることも可能である。しかしその発話をどのような音声で表現するかは、会話を実際に発話する（演じる）ことで初めて分かることであり、また学習者である留学生にとっては、日本人学生が演じることによって、どのような音声が適切なのかを実際に聞くことができ、また発話してみる機会を得ることにもなる。また、異なる2つの会話を演じることで、違いがはっきりわかる。

本稿では、この授業で、留学生が異なる会話を実際に演じた際に、2つの会話に含まれる同じ言葉にどのような音声的相違が表れているかについて分析する。

### 2.2 方法

今回は、2.1で説明した課題のうち、①全てのグループで同じ言葉を含む2つの会話を作成するという課題において、「え、そうなんですか」を含む2つの会話を演じた際に見られる音声面の相違について考察する。日本人学生と留学生が3～4人でグループを組み、「え、そうなんですか」を含む2つの会話（それぞれ会話A・会話Bとする）を作成し、練習して発表するという課題である。作成された会話の一例を以下に示す。

（会話A）

A：今日の部活、山田先輩来るって。

B：え、そうなんですか。

A：きみ、山田先輩と仲いいよね。

B：はい。

(会話B)

A：明日の授業なんだけど、30分長くなるって、みんなに伝えといて。

B：え、そうなんですか。わかりました。

A：はい、お疲れ。

会話Aと会話Bに共通する「え、そうなんですか」が異なる言い方になるように、前後の発話や会話の流れが作られているが、それぞれがどのような音声で発話されるかは実際に発話する(演じる)ことによって現れるものである。そこで、2つの会話を実際に演じる際に、どのような音声面の相違が現れているかを見ることにより、パラ言語情報の相違がどのような音声的特徴の相違として現れるかを分析する。

資料として、2015年度の授業(8グループ)と2016年度の授業(7グループ)を分析する。それぞれ日本人学生と留学生2~3名で組んだグループで、30分程度の会話作成時間、10分程度の練習時間を経て、2つの会話(会話A、会話B)を発表した。「え、そうなんですか」を含む発話は留学生が行なった。会話の流れや発話意図は様々であるが、留学生はそれぞれの会話で、異なる言い方で「え、そうなんですか」を発話している。今回は会話の流れや発話意図による分析ではなく、2つの異なる発話を実際に行なった際に、2つの発話にどのような音声面の相違が現れているか、その相違に特徴が見られるかどうかを分析した。

演じられた会話はビデオ録画を行ない、録画から音声抽出したものを音声分析をした。この際、マイクの距離などから音声が小さく、分析が十分できなかったものを除いた8グループ(2015年度4グループ、2016年度4グループ)を用いた。

まず音声面の相違を分析するため、各会話の「え、そうなんですか」について、高さ(基本周波数以下 $F_0$ )と長さ(持続時間)を測定した。

具体的には以下の点を測定した。

[高さ] (1) 「え、そうなんですか」全体について、

①  $F_0$  最大値 ②  $F_0$  最小値 ③  $F_0$  レンジ (最大値 - 最小値)

(2) 「え」のみについて

④ 始点  $F_0$  ⑤ 終点  $F_0$  ⑥ 「え」の  $F_0$  レンジ (終点 - 始点)

末尾イントネーションについては上昇と下降が見られたので、⑦ 2つの会話で同じか異なるかを記述した。↗が上昇、↘が下降、→が平坦である。

[長さ] ⑧ 「え、そうなんですか」全長持続時間(「え」に続く無音部分も含む)

「え」「そうなんですか」およびその間の無音部分の持続時間(⑨~⑪)

また、先行発話末から「え」までの無音部分の持続時間長を⑫発話タイミング長として測定した。

## 2.3 結果

### 2.3.1 高さ

高さに関する測定結果を表1に示す。

表1 会話Aと会話Bの音声特徴（高さ）

			基本周波数 (Hz)						⑦末尾 イント	
			(1)「え、そうなんですか」全体			(2)「え」のみ				
			①最大値	②最小値	③レンジ	④始点	⑤終点	⑥レンジ		
1	2015前	グループ1	A	166	111	55	141	164	23	↗
		B	142	98	44	98	156	58	↘	
2	2015前	グループ2	A	271	93	178	152	271	119	↘
		B	123	122	1	123	119	-4	↗	
3	2015前	グループ3	A	320	246	74	246	320	74	↘
		B	297	210	87	250	266	16	↘	
4	2015前	グループ4	A	444	156	288	228	307	79	↘
		B	433	168	265	363	421	58	↗	
5	2016前	グループ5	A	432	235	197	262	347	85	→
		B	330	216	114	216	266	50	↗	
6	2016前	グループ6	A	301	192	109	197	219	22	↗
		B	238	149	89	149	156	7	↘	
7	2016前	グループ7	A	235	150	85	150	219	69	↗
		B	141	132	9	132	135	3	↘	
8	2016前	グループ8	A	258	129	129	129	183	54	↘
		B	235	136	99	238	235	-3	↘	

会話A・会話Bという名称はあくまでそれぞれのグループにおける2つの会話を示す名称であり、共通する会話の流れや発話意図があるのではなく、個々の会話の流れや発話意図は様々であるが、各グループのA・B2つの発話は異なる言い方がなされているという点では共通している。そこに現れる音声面の相違は、異なる発話を実現した際の表現の仕方の違いと考えることができる。そこで今回は、異なる言い方をした際にどのような音声的相違が見られるかを分析するため、各グループごとに2つの発話を比較することにした。

表1に示したそれぞれの項目①～⑥についてAB両者の差を取り、今回は①F<sub>0</sub>最大値の差を基準とし、①の差が大きい順に並べ替えを行なった。また⑦末尾イントネーションについては2つの発話で同じ（例えば両者とも上昇）かどうかを「同・違」で示した。

結果を表2に示す。全てのグループにおいて①は値がA>Bであり正の値を取っている。①以外の項目で負の値を取っている項目は値がA<Bであることを示している。

表2 会話Aと会話Bの音声面の相違（高さの差）

			高さ：基本周波数 (Hz)						⑦末尾 イント
			(1)「え、そうなんですか」全体			(2)「え」のみ			
			①最大値	②最小値	③レンジ	④始点	⑤終点	⑥レンジ	
2	2015前	グループ2	148	-29	177	29	152	123	違
5	2016前	グループ5	102	19	83	46	81	35	違
7	2016前	グループ7	94	18	76	18	84	66	同
6	2016前	グループ6	63	43	20	48	63	15	違
1	2015前	グループ1	24	13	11	43	8	-35	違
3	2015前	グループ3	23	36	-13	-4	54	58	違
8	2016前	グループ8	23	-7	30	-109	-52	57	違
4	2015前	グループ4	11	-12	23	-135	-114	21	同

表2を見ると、①F<sub>0</sub>最大値の差が大きい発話では③レンジも大きく、また⑤「え」のみのF<sub>0</sub>も高くなっている。つまり、全体のF<sub>0</sub>が高いほうの発話は「え」のF<sub>0</sub>も高いということである。一方、①F<sub>0</sub>最大値の差が小さい発話を見ると、④「え」の始点、⑤「え」の終点が負の値を取っている(A<B)ことが分かる。これは、全体のF<sub>0</sub>が高いほうの発話で「え」のF<sub>0</sub>が低くなっていることを示しており、「え」が「そうなんですか」より相対的に低くなっていることを示している。

また、末尾イントネーションについては異なっている会話のほうが多いことも分かる。

### 2.3.2 持続時間

次に、長さ（持続時間）に関する測定結果を表3に示す。

表3 会話Aと会話Bの音声特徴（長さ）

				持続時間（秒）				⑫タイミング （秒）
				⑧全長	「え、そうなんですか」			
					⑨え	⑩間	⑪そうなんですか	
1	2015前	グループ1	A	0.98	0.2	0.27	0.51	0.38
			B	1.31	0.24	0.43	0.65	0.22
2	2015前	グループ2	A	1.5	0.2	0.17	1.13	0.57
			B	1.06	0.18	0.09	0.79	0.22
3	2015前	グループ3	A	1.23	0.15	0.05	1.04	0.67
			B	1.35	0.28	0.05	1.02	0.41
4	2015前	グループ4	A	1.19	0.16	0.1	0.93	0.65
			B	0.96	0.38	0	0.58	0.21
5	2016前	グループ5	A	1.03	0.15	0.08	0.81	0.46
			B	1.14	0.79	0	0.35	0.38
6	2016前	グループ6	A	1.13	0.13	0.08	0.92	0.44
			B	1.29	0.18	0.34	0.77	0.53
7	2016前	グループ7	A	1.12	0.2	0.19	0.73	0.33
			B	1.2	0.26	0.06	0.88	0.41
8	2016前	グループ8	A	1.58	0.45	0.42	0.7	0.19
			B	1.73	0.22	0.47	1.04	0.48

長さについても会話Aと会話Bの相違点を分析するため、A B両者の差を取り（全てA>B）、2.3.1で示した①全体の最大値の差が大きい順に並べ替えを行なった。2.3.1と同様に、負の値を示す項目は値がA<Bであることを示している。

表4 会話Aと会話Bの音声面の相違（長さの差）

			高さ	長さ：持続時間（秒）				⑫タイミング （秒）
			①最大値 （Hz）	⑧全長	「え、そうなんですか」			
					⑨え	⑩間	⑪そうなんですか	
2	2015前	グループ2	148	0.44	0.01	0.09	0.34	0.35
5	2016前	グループ5	102	-0.10	-0.64	0.08	0.46	0.07
7	2016前	グループ7	94	-0.08	-0.06	0.14	-0.16	-0.08
6	2016前	グループ6	63	-0.16	-0.04	-0.26	0.15	-0.10
1	2015前	グループ1	24	-0.33	-0.04	-0.16	-0.14	0.16

3	2015前	グループ3	23	-0.12	-0.13	0.00	0.01	0.26
8	2016前	グループ8	23	-0.15	0.23	-0.05	-0.33	-0.30
4	2015前	グループ4	11	0.23	-0.22	0.10	0.35	0.45

表4を見ると、⑧全長持続時間、⑨「え」の持続時間が負の値を取っているグループが多いことが分かる。これは $F_0$ が高いほうの発話より低い発話のほうが持続時間が長いことを示している。一方の発話で $F_0$ が高くなっている場合、もう一方では持続時間が長くなっているということである。高さで持続時間の間の相関（ $F_0$ が低くなると持続時間が長くなる）があるかどうかは不明であるが、高さが低い発話は概ね感情の程度も低い発話であると考えられるので、発話速度が緩やかになっている可能性がある。また、この点については、 $F_0$ が高い発話で持続時間が短くなっているという見方もできる。高さが高い発話は感情の程度の高い発話であると考えられるので、発話速度が速くなっている可能性がある。

また、① $F_0$ 最大値の差が最も大きいグループ（グループ2）は持続時間も正の値を取っている。これは、高さも長さも大きい発話と、双方とも小さい発話という現れ方をしているということである。この特徴は、高さの差がもっとも小さいグループ（グループ4）でも見られ、こちらは持続時間が長い発話と短い発話という現れ方をしているということである。

### 3. まとめ

同じ言葉「え、そうなんですか」を異なる言い方で発話する課題において、留学生の2つの発話にどのような音声的相違が見られたかを分析した結果、以下の結果となった。

- (1) 全体の高さ（ $F_0$ ）が高いほうの発話は「え」の $F_0$ も高い
- (2)  $F_0$ 最大値の差が小さい発話では、「え」が「そうなんですか」より相対的に低くなっている。
- (3) 末尾イントネーションが異なっている会話が多い。
- (4) 一方の発話で $F_0$ が高くなっている場合、もう一方（ $F_0$ が低い発話）では持続時間が長くなっている。

今回の分析から、異なる言い方で発話する際に現れる音声面の相違には傾向が見られることが分かった。(4)については、高さの高い発話の持続時間が短くなっているとも見られる。いずれにしても、単に高さのみの相違、長さのみの相違ではなく、高さで長さに関連性のある実現によって2つの発話の違いが表現されていることが分かった。

今回の結果はそれぞれの会話を1回だけ演じたを分析した結果であり、数回演じると、また演じる人が変わると異なる実現が見られる可能性がある。条件を変えても今回のような傾向が捉えられるのかどうか、今後検討していきたいと考えている。

### 注

- 1) ②について、過去に選ばれた言葉には、「だよね」「もういいよ」「わかった」「すごいね」「うそでしょ」などがある。いずれも相手の言葉に対する反応の言葉であり、相手の言葉に対してどう感じたかによって言い方が変わる。また、自身の言い方によって相手の反応が変わるような言葉も選ばれている。「だいじょうぶ?」「もうたべちゃったの?」などの疑問文、「気

にしないほうがいいよ」「無理して食べなくていいんですよ」などの相手への配慮を示す文などである。例えば「もう食べちゃったの？」であれば、食べてしまったことを非難しているのか、食べるのが速くて驚いているのか、といったことが言い方によって示され、その言い方によって相手の反応が変わる。

#### 参考文献

鴻上尚史（2005）『表現力のレッスン』講談社

鴻上尚史（2011）『演技と演出のレッスン』講談社

橋本慎吾（2003）「演劇指導論に基づく日本語感情表現指導試論：「感情そのものは思い出せない」について」、岐阜大学留学生センター紀要2002、45-57ページ

橋本慎吾（2012）「演劇を活用した日本語音声教育」、『ドラマチック日本語コミュニケーション』ココ出版、38-58ページ

平田オリザ（1995）『現代口語演劇のために』晩聲社

平田オリザ（2004）『演技と演出』、講談社現代新書1723

森大毅、前川喜久雄、粕谷英樹（2014）『音声は何を伝えているか』、コロナ社

Trager, G. L. (1958) "Paralanguage: a First Approximation", *Studies in Linguistics*, 13, pp1-12

光村図書出版『小学校 国語 4年 上』

# 現代日本語における接頭辞「お」の 付く語の意味分類について

Meaning Classification about Nouns with Prefix O in Contemporary Japanese

村田志保

要旨：

「お荷物」「お菓子」「お箸」などのような接頭辞「お」の付く語は数多く存在し、主に敬語表現として用いられる。しかし、その用法に注目すると、相手の持ち物に対して使用する場合は尊敬語、自分の持ち物の場合は謙讓語や美化語として用いられるなどの違いがある。また美化語として使用される場合、女性語としての要素も含む場合があり、それぞれの語が様々な意味を持ち、また「お」を付ける規則も例外が多く、日本語教育の場では扱いにくい語となっている。

そこで本稿では、現代日本語を扱う国語辞典6冊から、接頭辞「お」の付く語を採取し、それぞれの語の意味を把握するという目的で、意味分類を試みた。その結果、「お」の付く語を敬語に関わる「尊敬語」「謙讓語」「丁寧・美化語」の3つと、「その他の語」に4分類することができた。また、この4つの意味分類に属する語には、「お」を付けた形で一語化している語か否かといった形態的な側面での偏りがあることがわかった。

## 1. はじめに

接頭辞「お」は「お電話」「お話」「お箸」「お水」など、名詞に冠してさまざまな意味を名詞に持たせることができる。しかしながら同じ語であっても文脈によって意味が異なることも少なくない。例えば（店員から客に向かって）「お箸をお取りしましょうか。」と言え、動作主は話し手であり、相手に向ける箸であるため謙讓語内であっても尊敬語的な用法と判断できる。「箸」を忘れた上司に対し、「私のお箸をお使いになりますか。」のように動作主は話し手ではなく相手である「上司」となるが、話し手の持ち物である場合は謙讓や丁寧な用法とも判断できる。また（箸を忘れた後輩に対し）「私のお箸でよかったら使って。」のように動作主は後輩であっても、「お」を付けて丁寧に述べることもできる。また（小さい子どもに向かって）「お手々ふいた？」など敬語とは関係なく使用できる語もある。このように形はすべて同じでありながら、話し手の待遇意識によってさまざまな使い方ができる。

接頭辞「お」の使用に大きく関わる相手への「配慮」とは、敬語表現のみならず、親愛表現、ぞんざいな表現等も含め、「コミュニケーションにおける言語使用を背後で支える各種の意識や心配りを表す語」（国立国語研究所2006：2）であると定義し、狭い意味の敬語だけでなく待遇意識などもここに含めることができる。つまり「配慮」とは、敬語に限らずどの意味を持つ語にも存在しうるものである。例えば「手」に対して「お手々」、「ませていること」を「おしゃま」などと「お」を付け大人から子供を対象に述べる言葉がある。これを幼児語と言う。子供に対して

という点では人間関係に配慮して述べるのだが、敬語のように、相手を立てるような待遇意識や対人行動上の志向性を持たないという点で、敬意を含む表現ではないと考えられる。

以上の点から、本稿では、配慮に関わる接頭辞「お」の働きとして、「敬語」か、それ以外かを区別して考察していく。なお、考察外としたいのは、「お」を付ける規則である。一般的に、語種で区別され、「お」は和語、「ご」は漢語に付くと説明されることが多いが、例外も多い。本稿ではこのような規則に言及するのではなく、現代日本語において語彙化している「お」の付く言葉を取り上げ、意味によって分類することを目的としている。

## 2. 先行研究と調査方法

### 2.1 先行研究

接頭辞「お」は敬語に大きく関わるため、まずは敬語の用法を確認しておく。

菊地（1997）では、敬語を次のように分類し説明されている。

尊敬語 … 話手が主語を高める表現である。

謙讓語A … 話手が補語を高め、主語と低める（補語よりも低く位置づける）表現である。

謙讓語B … 話手が主語を低める（ニュートラルよりも《下》に待遇する）表現である。

丁寧語 … 話手が（同じ内容を）聞き手に対して丁寧に述べる表現である。

美化語 … 話手が（同じ内容を）きれいに／上品に述べる表現である。

「尊敬語」と「謙讓語A」に共通するのは話し手からみて「相手側又は第三者」対して対人関係を意識することであり、「謙讓語B」「美化語」「丁寧語」は「聞き手」にどう表現するかということである。「美化語」は「丁寧語」と同様、対人関係を意識しないで使用できるが、話し手は相手に上品に見せるために述べることができる。しかし「お手々を洗おう」などといった幼児に向かって述べる「お外」や「お手々」も上品さを見せる美化語としてよいだろうか。主婦同士が「うちのお台所も古くなってきたから。」と述べる「お台所」と「お手々」を同等に扱ってよいだろうか。

菊地（1997）では、美化語を「菓子」に対する「お菓子」、「花」に対する「お花」など「上品」という待遇的意味を持つものとしてとらえておくと述べられている。宮地（1999）では、美化語は「言葉づかいの品位への配慮をあらわす敬語」、尾崎（2009）においても話し手の上品さを見せる語であると説明されている。これらは敬意というよりはむしろ話し手の上品さや品位を保つという点で、尊敬語、謙讓語と区別していることがわかる。

また佐竹・西尾（2005）では、美化語の形式は「お／ご+名詞」のみで、話し手自身の言葉を上品にするために使うと述べており、「お間抜け」や「ご大層」、「おめでたい（人）」などといった皮肉や嘲笑をあらわす言葉は美化語の「お／ご」を付けないとしている。したがって、美化語のような「お+名詞」の形を持ちながら、意味によっては美化語ではない語も多く見られることを認めている。

そこで本稿では、敬語として「尊敬語」「謙讓語」「美化語」と、敬語以外の語という分類で考えていきたい。

## 2.2 調査方法

本稿では6冊の国語辞典を基に、現代語で知っておくべき接頭辞「お」の付く語を採取し、意味的な側面で分類を試みる。それらの意味記述に基づき分類項目を設定し、採取した語を整理する。ここで述べる意味記述とは、それぞれの辞書で見出し語を説明するために記述された文章を指す。例えば「お達し」の場合、「役所や目上の人からの知らせや言いつけをていねいに言ったことば。」(『三国』)と説明されている。この記述を意味記述と呼ぶ。この記述に「尊敬語」「謙讓語」「丁寧語」「美化語」と記載のあるものはそれぞれに分類し、「お達し」のように敬語分類の記載のない場合には、「目上から」と記述のあるものには「尊敬語」、このような人間関係の記載のなく「丁寧に」だけ記述のあるものには「丁寧語」と判断した。また敬語以外の語で、「幼児語」、「俗語」、「女房詞」、「親愛」、「親しみ」などと記述のある語もそれぞれの分類を行った。

さらに注目したいのは、語の形態的側面である。語によっては「お蔭」「おにぎり」のように「お」をとると「蔭」「にぎり」となり、もとの意味をなくしてしまう語や、「おやつ」が「やつ」というように意味を持たなくなる語がある。これを「一語化」と呼ぶ。それに対し「お疲れ」であれば、意味記述で「疲れ」の尊敬語(『三省堂国語辞典』)というように「お」を付けなくても「疲れ」のみで意味が通り、「お」を付けることで尊敬語を表すことのできる語がある。これら二つの側面を考慮し、「お」の付く語を「一語化した語」と「接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語」に分類する。その語数の集計から分類項目ごとの語数の偏りを見る。記述によっては「尊敬・美化」と説明のある語もあり、それについては述べ語数で扱っていく。

表記については、どの辞書も漢字表記の「御」、ひらがな表記の「お」の2種類を併用しているが、辞書ごとに語による表記が異なるため、本稿ではすべてひらがな表記の「お」で統一することにした。

## 3. 調査結果

### 3.1 国語辞典からの採取

国語辞典の選定に関しては、接頭辞「お」の性質に合わせ敬語分類を明記していること、現代語を多く取り扱っていることを条件に『集英社国語辞典第3版』(以下、『集英社』)『三省堂国語辞典第7版』(以下、『三国』)『岩波国語辞典第7版』(以下、『岩波』)『明鏡国語辞典第2版』(以下、『明鏡』)『学研現代新国語辞典改訂第5版』(以下、『学研』)『明治書院精選国語辞典新訂版』(以下、『明治』)を利用し、接頭辞「お」を冠すと判断した語を採取した。また『日本国語大辞典第2版』は現代語以外にも多く含まれているため、本稿では考察外とする。またいわゆる百科事典的な要素を含む『広辞苑』『大辞泉』『日本語大辞典』などや、小学生、中学生を対象とした学習国語辞典なども考察外とした。また品詞は名詞のみとし、形容詞(「お寒い」)、感動詞(「おめでとう」など)、慣用句(「お目にかかる」など)、接続詞(「おまけに」)は考察外とする。

それぞれの収録語数と接頭辞「お」の付く語の収録語数、それぞれの辞典で明記されている敬語分類を以下の表1にまとめている。

表1 収録語数の比較と敬語分類表記

	収録語数(語・項目)	接頭辞「お」の付く語	敬語分類
集英社	約92,000語	約310語	尊敬、謙譲、丁寧
三国	約82,000語	約400語	尊敬、謙譲、丁寧、美化、丁寧
学研	約75,600語	約280語	尊敬、謙譲、丁寧
明鏡	約70,000項目	約280語	尊敬、謙譲、丁寧、美化、丁寧
岩波	約65,000語	約300語	尊敬、謙譲、丁寧
明治	約50,000項目	約120語	尊敬、謙譲、丁寧

現代語のなかでも『三国』で「お」の付く語が多くなっていることがわかる。また5分類を採用している辞書は『三国』と『明鏡』のみであり、他の辞書では3分類であることがわかる。「尊敬」「謙譲」についてはどの辞典でも分類されているが、「丁寧」「美化」「丁寧」については辞書によって扱いが異なっている。

### 3.2 国語辞典における接頭辞「お」の意味記述について

前章で敬語のそれぞれの分類について見てきたが、接頭辞「お」は敬語の何に関わるのだろうか。「お～になる」「お～する」の形からもわかるように、尊敬語だけでなく謙譲語にも関わり、さらには「お箸」などの美化語にも関わっている。

ここでは各辞書においてどのような意味で説明されているのかについて、整理しておきたい。ここでは動詞、形容詞、形容動詞に関わる説明を省き、敬語5分類を採用している『明鏡』、3分類を採用している『集英社』から取り上げ、整理したものが表2である。

表2 接頭辞「お」の意味記述

明鏡	<ul style="list-style-type: none"> <li>①尊敬 Aに関係する事物・状態や、Aが行う動作について、Aを高める。</li> <li>②謙譲 Aに差し向ける事物や、Aに及ぶ動作について、Aを高める。</li> <li>③美化語 美しく上品な言い方をすることで、自分の品位を高める。いろいろな物事について言う。</li> <li>④《「お…様」「お…さん」の形で、他人の状態を表す語を入れて》他人に対するねぎらい・慰めの気持ちを表す。</li> <li>⑤《人を表す語の上に付いて》軽い尊敬・親愛の気持ちを表す。</li> <li>⑥からかいや自嘲、ふざけの意を表す。</li> <li>⑦本来の敬意が失われて、形式的に添える語。</li> </ul>
集英社	<ul style="list-style-type: none"> <li>①(相手に属するものに付いて)相手への敬意を表す語。</li> <li>②(相手に対する自分の行為に付いて)相手への尊敬を表す語。</li> <li>③(体言について)丁寧の意を表す語。</li> <li>④(女性の名前に付いて)尊敬・親愛の気持ちを表す語。</li> </ul>

『明鏡』では、「尊敬」「謙譲」「美化語」と敬語分類を基本とした説明に、「ねぎらい・慰め」「軽い尊敬・親愛」「からかい・自嘲・ふざけ」「形式的に添える語」などが補足されている。『集英社』では、「敬意」「尊敬」「丁寧」「尊敬・親愛」は説明されているが、「謙譲」については言及はない。この2冊を統合すると、接頭辞「お」は敬語分類の「尊敬」「謙譲」「丁寧」「美化語」に加え、「親愛」「敬意」「からかい・自嘲・ふざけ」の意味を持つことがわかった。

それぞれの用法について見てみると、「尊敬」は「Aが行う動作について」、「謙譲」は「Aに及ぶ動作」（『明鏡』）で、「尊敬」は「動作主」、「謙譲」は動作の及ぶ相手に関する事がわかる。「丁寧」や「美化語」は文法的な記述はなく、「ものごとに付く」や「体言に付いて」とどちらも人に関わる記述はなく、名詞に付くという点で一致している。そこで本稿では「丁寧語」と「美化語」はひとつの分類としてまとめていく。

また敬語以外に「お」を付けて一語化している語には、「お祭り」「お神輿」「お神酒」など神仏祭礼に関する語や、「お冷や」「おかず」「お浸し」などの「女房詞」、それ以外に「お節」「お好み焼き」など「料理」に関する語、「おもらし」などの「幼児語」も見つかっている。「女房詞」とは天皇や貴人に給仕する女房たちが食べ物の名前を直接言うことを避け、不快感や不潔感を婉曲的に表したのがはじまりである。

これらの意味記述から、接頭辞「お」は敬語に関わる「尊敬」「謙譲」「丁寧・美化語」と、敬語に関わらない「親愛」「からかい・自嘲・ふざけ」や「女性語」と呼ばれる語もあることがわかった。「女性語」に関しては、記述に「女房詞」「もと女房詞」「女性語」と記述のある語を含める。またその語のなかには、「お」を付けた形で一語化し意味を持っている語も中には多いことがわかった。その区別も併せて提示していく。

### 3.3 敬語に関わる「お」の付く語

#### 3.3.1 「尊敬語」に関する接頭辞「お」の付く語

『集英社』『三国』『岩波』『明鏡』『学研』『明治』の国語辞典より、それらの意味記述に「尊敬語」「尊敬」「敬って」「敬意」「敬称」と意味記述のある語は「相手を高める」とみなし「尊敬」として分類した。

#### <「尊敬語」を表す「お」の付く語> (123語)

お家、お家様、お出で、お稲荷さん、お祝い、お歌、お歌所、お母様、お母さん、お蚕、お帰り、お神楽、お隠れ、お方、お構い、お上、お客、お客様、お髪、お国、お声掛かり、お子様、お腰、お骨、お言葉、お好み、お先、お座敷、お里、お爺さん・お祖父さん、お七夜、お釈迦様、お酌、お邪魔、おしょさん、お嬢様、お嬢さん、お上手、お勤め、お世話、お祖師様、お側、お母様たあさま、お題目、お宅、お立ち、お旅所、お霊屋、お為、お使い、お疲れ、お付、お次、お勤め、お手、お手の筋、お出座し、お手元、お手元金・お手許金、お寺様、お寺さん、お父様、お父さん、お伽、お得意、お所、お年、お友達、お酉様、お直り、お流れ、お情け、お馴染み、お成り、お似合い、お兄さん、お似まし、お荷物、お姉さん、お歯ひめさま、お婆さん・お祖母さん、お羽車、お運び、お話、お払い、お姫様ひめさま、お日様、お膝下、お姫様、お拾い、お部屋様、お遍路、お坊さん、お坊ちゃま、お盆、お前、お座し、お待ちかね、お祭り、お身、お見え、お神輿、お見逸れ、お宮、お向かい、お目、お眼鏡、お召し、お召し替え、お召し物、お召し列車、お目玉、おめでた、お目見得もうさま、お父様、お持たせ、お持ち帰り、お物、お役御免、お休み、お呼び、お礼、お歴

このなかには、人を表す語、その人の身体部位、動作に関わる語、持ちもの、場所、乗り物に関する語や神仏に関する語が以下のように採取された。

「身体部位」…お髪、お手、お歯、お目、お身、お手元

「属性」…お得意

「衣類」…お腰、お眼鏡、お召し、お召し物

「親族」…お母様、お母さん、お子様、お爺さん、お祖父さん、お嬢様、お嬢さん、  
お母様、お父様、お父さん、お兄さん、お姉さん、お坊ちゃま、お父様

「作品」…お歌

「その他」…お荷物、お手元金、お召し列車

「その他」にもあるように、その人が手に持つ分離できる「荷物」、乗り物などにも「お」を付けて尊敬の意を持たせることができることがわかった。

「尊敬」を表す語のなかには「一語化している語」と「接頭辞＋語基で成り立つことが明らかな語」が混在している。それらは、辞書の意味記述において、「お手」を「手の尊敬語」、「お年」を「年の尊敬語」を説明されている語は「接頭辞＋語基で成り立つことが明らかな語」と判断し、それ以外の語については「お」を付けた形で一語化している語と見なす。

<「尊敬」を表す、一語化した語> (49語)

お家様、お出で、お稲荷さん、お歌所、お母様、お隠れ、お上、お七夜、お釈迦様、お嬢様、お勧め、お宅、お立ち、お霊屋、お為、お使い、お疲れ、お付、お寺様、お寺さん、お酉様、お直り、お流れ、お成り、お似合い、お似まし、お羽車、お運び、お払い、お日様、お膝元、お拾い、お部屋様、お遍路、お前、お座し、お待ちかね、お見逸れ、お召し、お召し替え、お召し物、お召し列車、おめでた、お目見得、お父様、お持たせ、お役御免、お呼び、お歴歴

「尊敬」を表す「お」の付く語は全体で123語、「一語化している語」は49語、「接頭辞＋語基で成り立つことが明らかな語」は74語という結果が得られた。

### 3.3.2 「謙譲」に関する接頭辞「お」の付く語

謙譲語は、文化庁(2010)では「自分側から相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの。」と説明のあるように、ここでも相手に関するものや動作を表す言葉がほとんどである。ここでは辞書に「謙譲」「謙譲語」「へりくだる」と意味記述のある語の採取を行った。

<「謙譲」を表す「お」の付く語> (22語)

お祝い、お鏡、お構い、お口汚し、お酌、お邪魔、お勧め、お世話、お供え、お粗末、お伽、お願ひ、お払い、お袋、お披露目、お見逸れ、お目見得、お目文字、お呼ばれ、お呼び立て、お礼、お詫び

「謙譲」を表す「お」の付く語は全体で22語、「一語化している語」は10語(お鏡、お口汚し、お払い、お袋、お披露目、お見逸れ、お目見得、お目文字、お呼ばれ、お呼び立て)、「接頭辞＋語基で成り立つことが明らかな語」は12語という結果が得られた。

### 3.3.3 「丁寧と美化語」に関する接頭辞「お」の付く語

接頭辞「お」は美化語であると説明されることが多い理由は、「お」の付く語の総数がそれぞれの辞書の約3分の1を占めているからであろう。なお『明鏡』では、「丁寧」と「美化語」が一部別になっている語もあるが、「丁寧語」として扱われている語は「お祝い」「お方」「おめでた」「お休み」の4語のみである。

それぞれの辞書から「丁寧・美化語」「丁寧に述べる」と意味記述のある語、『岩波』に関しては「丁寧表現」と記述のある語の採取を行った。

#### <「丁寧・美化語」を表す「お」の付く語> (150語)

お愛想、お稲荷さん、お祝い、お薄、お歌、お蚕、お鏡、お欠き、お神楽、お方、お金、お釜、お構い、お上さん、お爛、お気に入り、お客、お灸、お経、お髪、お国、お香香、お香料、お骨、お好み、お座、お菜、お先、お座敷、お札、お里、お三時、お仕置き、お辞儀、お仕着せ、お下地、お七夜、お忍び、お仕舞、お湿り、お下、お酌、お重、お上手、お新香、お勤め、お澄まし、お相撲、お歳暮、お世辞、お世話、お供え、お側、お粗末、お揃い、お代、お題目、お互い、お宝、お談義、お団子、お茶、お茶請け、お茶会、お中元、お銚子、お猪口、お次、お作り、お付け、お勤め、お摘み、お通夜、お汁、お釣り、お手、お手洗い、お出入り、お出掛け、おでき、おでこ、お手伝い、お手前、お天気、お伽、お得意、お年、お屠蘇、お泊まり、お友達、お酉様、お取り寄せ、お腹、お馴染み、お鍋、お涙、お納戸、お似合い、お握り、お荷物、お願い、お鉢、お初、お初穂、お花、お花畑、お囃子、お払い、お針、お日柄、お髭、お浸し、お櫃、お昼、お披露目、お布施、お札、お古、お弁当、お遍路、お盆、お任せ、お待ちかね、お祭り、お祭り騒ぎ、お味御付け、お神輿、お水、お見舞い、お耳、お土産、お迎え、お婿さん、お結び、お襦袢、お目当て、おめかし、お眼鏡、おめでた、お持ち帰り、お守り、お役、お約束、お休み、お呼ばれ、お呼び立て、お嫁さん、お礼、お詫び、お椀

「丁寧・美化語」を表す「お」の付く語は全体で150語、「一語化している語」は12語（お鏡、お欠き、お構い、お髪、お腰、お忍び、お湿り、お作り、お付け、お摘み、おでき、お酉様）、「接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語」は138語という結果が得られた。

## 3.4 敬語に関わらない語

### 3.4.1 「親愛」「女性語」「幼児語」「俗語」に関する接頭辞「お」の付く語

「親愛」を表す語については、「人を表す語」については意味のなかで「親しみ」という記述が見られ、これらが「親愛」を表す語であると判断できる。特に「様」に対して「さん」を付ける親称語彙に多く見られた。

#### <「親愛」を表す「お」の付く語> (17語)

お出で、お母さん、お上さん、お爺さん・お祖父さん、お嬢さん、お天道様、お父さん、お兄さん、お姉、お姉さん、お婆さん・お祖母さん、おばか、お日様、お雛様、お袋、お坊ちゃん、お巡りさん

「お上さん」については、妻を表す語で「上さん」があるものの、「お」を付けると意味の幅が広がるため、配慮差とはみなさないこととする。「親愛」を表す「お」の付く語は全体で17語、「一語化している語」は9語（お出で、お上さん、お嬢さん、お天道様、お姉、お日様、お雛様、お袋、お巡りさん）、「接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語」は8語という結果を得られた。

「女性語」とは、古くは女房詞に由来するものである。ここでは各辞書の意味記述に「女性語」「女房詞」という、キーワードがあるものを採取している。また「おかか」「お数」「お強」「おなか」「おつむ」「お冷や」「御拾い」「お襦袢」「お目文字」は「もと女房詞」と記述されていたものもあったが、女房詞由来としてここに記載しておく。

#### <「女性語」を表す「お」の付く語> (46語)

おかか、お鏡、お欠、お数、おかちん、お焦げ、お腰、おこた、お薦、お強、お薩、おざぶ、お澄まし、お三時、お下地、お酌、おじや、お湿り、お喋り、お重、お新香、お玉、お月様、お作り、お付け、おつむ、お手塩、おでん、お通し、お熱、お中・お腹、おなら、お願ひ、お萩、お菌黒、お跳ね、お針、お日様、お浸し、お冷や、お平、おふう、お拾い、お星様、お襦袢、お目文字

「女性語」を表す「お」の付く語は全体で46語、「一語化している語」は2語（「お熱」「お酌」）、「接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語」は44語という結果が得られた。

これらの形態的な特徴として、「お焦げ」「お喋り」「お冷や」「お澄まし」「お付け」「お湿り」「お作り」など動詞の連用形に「お」を付けた語、「おかか」「お下地」など全く他の語を言い換えた語、「おざぶ」「お薩」「お鏡」「お欠」「お重」など「お」を付けもとのことばを省略した語が見られる。中には一語化していない「お熱」「お酌」も見られるが、その他はすべて一語化している。

その他「料理」に関する語として「お握り」「お好み焼き」「お結び」「おみおつけ」「お焼き」が見られた。「お菜」は『明鏡』だけ見出し語として見られたが、美化語として記述されているため、ここでは女性語として扱わなかった。

そのほか、「幼児語」と「俗語」を以下に記載しておく。

#### <「幼児語」を表す「お」の付く語> (19語)

おいた、お絵描き、お三時、おしゃま、おちんちん、お月様、おつむ、お手々、おねしょ、お眠、お化け、お日様、おふう、お星様、お土産、お漏らし、お目ざ、お目々、お漏らし

#### <「俗語」を表す「お」の付く語> (45語)

お足、おいた、お蚤<sup>かか</sup>、お嬢<sup>かか</sup>・お母、お神楽、お冠、お欠き、お気に入り、お蔵入り、お子様、お釈迦、おしゃま、お邪魔虫、おじゃん、お受験、お揃い、お宝、お宅、お立ち台、お陀仏、お玉杓子、おたんこなす、おたんちん、おちゃっぴい、お茶の子、お月様、お局、お手玉、お手付き、お泊まり、お直し、おなら、お荷物、お姉<sup>ねえ</sup>、お脳、お上りさん、お引き摺り、お披露目、お巡り<sup>まわ</sup>、おまんま、お神酒、お宮、お目見え泥、お約束、お礼参り

「幼児語」「俗語」とはその一語で意味を持つ語であり、「接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語」は見つかっていない。しかし「お釜」のように、「お」を付けるか付けないかによる配慮的な意味も含むが、意味記述に俗語の意味として「尻」「男色」と記述されており、配慮とは関係なしに使用できるともされている。従って2つの意味を持つと解釈できる。また「お荷物」も「(他人の)荷物」の尊敬語、美化語」という意味と「負担になっている物や人。やっかいもの。」という意味を持っている。後者の場合は「お」の取り外しがなく、一語化で意味を持っている俗語である。

### 3.4.2 その他の「お」の付く語

ここでは特に意味記述にあった「からかい・自嘲・ふざけ」を、話し手自身について表せるかを確認し、敬語表現とどのように異なるのかその記述の内容を考察していきたい。それぞれの意味記述に「からかい・自嘲・ふざけ」のキーワードが見られる語はそのまま採取し、その他の意味を持つ語なども提示していく。

「非難」と記述されている「お役所仕事」や、「自分の利益を図る」と記述されている「お為ごかし」、「機嫌の悪いこと」と記述されている「お冠」とどう異なるのかそれぞれの辞書の意味記述を基に考えていきたい。

#### 「お役所仕事」

『集英社』…「形式的で融通が利かず、時間のかかる仕事のやり方。役所の仕事ぶりを皮肉ってという語」

『学研』…「形式を重視し、能率の悪い官庁の仕事。皮肉ってという語。」

『明鏡』…「形式的で、不親切・非能率になりやすい仕事ぶりを非難してという語。」

どの意味記述においても、「敬語」のような「高める」「へりくだる」「丁寧に述べる」という意は含まれず、人間関係の制限もない。相手ではなく話し手についても述べられる語である。

「お調子者」も「敬語」以外の意味を含む点で同様である。

#### 「お調子者」

『岩波』…「①いい加減に調子を合わせる人。②軽はずみでうわついた事をする人。」

『三国』…「調子に乗りやすい人。」

『集英社』…「軽はずみでいい加減に調子を合わせる人。軽率で浮薄な人。」

『学研』…「①いいかげんに調子を合わせる、信用できない人。②軽はずみで、調子にのりやすい人。」

『明鏡』…「→調子者。」

「調子者…すぐ調子にのって軽はずみなことをする人。また、すぐに相手と調子を合わせていい加減なことをする人。」

『明治』…「①軽はずみで、調子に乗って浮ついたことをする人。おっちょこちょい。②いい加減に調子を合わせる人。調子者。」

『三国』 以外は、「いい加減」「軽はずみ」「信用できない」「軽率」などといった、「お調子者」の「人」をからかうような言葉であることがわかる。この語についても敬語のような人間関係についての制限もなく、話し手についても述べられる語である。

また「お為ごかし」「お手盛り」のように「皮肉」や「非難」で意味記述されず、話し手に「利益」が与えられる意味を表す言葉も見られる。

#### 「お為ごかし」

『岩波』 …人のためにするように見せて実は自分の利益を図ること。

『学研』 …相手の利益をはかるように見せかけて、裏では自分の利益をたくらむこと。

『三国』 …人のためにするように見せて、実は自分の利益を図ること。

『明治』 …表面は他人のためにするように見せかけて、実は自分の利益を図ること。

#### 「お手盛り」

『岩波』 …自分の都合なように自分でとりはからうこと。

『学研』 …①自分が食べるために、自分で食べ物を器に盛ること。

②自分に都合のいいように、自分で勝手にとりはからうこと。

『三国』 …自分につごうのいいように取りはからうこと。

『集英』 …①自分で食べ物を食器に盛ること。

②自分に都合のいいように、自分で取り計らうこと。

『明鏡』 …自分に都合のいいように勝手に取り計らうこと。

『明治』 …（自分で食器に食物を盛ることから）自分の利益になるように自分で取り計らうこと。

これらには「皮肉」や「非難」などといったキーワードは含まれないものの、「自分の都合のいいように取り計らう」とすれば、自分の動作を自分の都合に合わせるという点で動作主の動作を相手に向ける謙譲語とは異なる。また人間関係の制限もなく、話し手や相手に対しても使用できる語である。

また人の「怒り」を描写する「お冠」と何が異なるのであろうか。「お冠」について、どのような意味が記述されているのか見ていきたい。

#### 「お冠」

『岩波』 …不機嫌なこと。怒っていること。

『学研』 …怒って機嫌の悪いこと。ふきげん。

『三国』 …きげんの悪いこと。

『集英社』 …機嫌が悪いこと。怒っていること。

『明鏡』 …怒ってきげんが悪いこと。なきげん。

『明治』 …（形動）怒っているさま。不機嫌な様子。

これらの意味記述においては、「お為ごかし」や「お手盛り」とは異なり、相手が「怒る」「不

機嫌」といった人の描写であるため、相手に使用する場合は「尊敬」とも判断できる。しかしこれらの意味記述には人間関係は明記おらず、話し手自身にも使用できると判断してよいだろう。

<その他に関する語>

お偉方、お薩、お座なり、お定まり、お為、お為顔、お為ごかし、お為筋、お調子者、お手盛り、お天気屋、お慰み、お馴染み、お荷物、お上りさん、お引き摺り、おべんちゃら、お役所仕事

ここで一語化していない語は「お荷物」のみで、他はすべて一語化している。敬語に関わらないその他の「お」の付く語は全体で146語、「一語化している語」は143語、「接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語」は3語という結果を得られた。

3.5 まとめ

6冊の国語辞典を基に、接頭辞「お」の付く語を採取し、分類を試みた。その結果、接頭辞「お」は敬語に関わる語であるという認識を持たれることが多いが、それだけでなく敬語に関わらない語もあることがわかった。また敬語に関わるものも、「尊敬」「謙譲」「丁寧・美化語」に分類される。つまり、接頭辞「お」の付く語は、「尊敬」「謙譲」「丁寧・美化語」「敬語に関わらない語」の4種に意味分類される。

さらに、それぞれの語を一語化した語と「お」を取り外して「配慮差」を出す語に注目して分けた場合、表3が示すように、その数は意味分類別に偏りがあることもわかった。

表3 接頭辞「お」の付く語意味分類別語数集計

	尊敬語	謙譲語	丁寧・美化語	敬語に関わらない語
一語化している語	49語 (約40%)	10語 (約45%)	12語 (約8%)	143語 (約95%)
接頭辞+語基で成り立つことが明らかな語	74語 (約60%)	12語 (約55%)	138語 (約92%)	6語 (約5%)
合計	123語	22語	150語	151語

分類別に見ると、合計数として述べ語数の多いのは「丁寧・美化語」となっており、やはり接頭辞「お」の付く語は「丁寧・美化語」というイメージが大きいのも理解できる。「配慮差」は敬語に関われば語数も多くなると推測できるが、実際には「尊敬語」「謙譲語」において「一語化している語」も40%と半数近い数を占めている。

一語化している語の数を意味項目別に見てみると、以下のような傾向が見られた。

【一語化している意味項目別】

敬語に関わらない語 > 謙譲語 > 尊敬語 > 丁寧・美化語

「敬語に関わらない語」はほぼ一語化されており、「謙譲語」も全体の約半分ほどは一語化され

ている。しかし「謙讓語」は全体の合計数が他に比べ極端に少なくなっているため、他の分類項目と比較するには不十分である。「丁寧・美化語」と「敬語に関わらない語」については「接頭辞＋語基で成り立つことが明らかな語」の数は90%以上となっており、敬語としての要素は少ないと言える。

#### 4. おわりに

本稿では、意味分類を目的として、現代語に限って「お」の付く語の採取を行った。古語を扱う辞書にも記載があるように、古くは平安時代より使用している語も多く残されているので、古語の考察を進めると、「お」の付く規則なども見えてくる可能性がある。語種の規則として和語は「お」とされているが、規則外が多く、あまり役に立たない。そこに言及するには、なぜその規則が設定されるようになったのかという古語を探る必要があると思われる。

日本語教育においては、接頭辞「お」は配慮表現や敬意的な表現として積極的に取り入れられていないのが現状である。なぜなら規則化されておらず、語によっても用法が重なり、あまり生産性のないことが理由として考えられる。しかし、実際の会話では使用されることも多く、配慮や敬意を表す上でも適切に用いる必要がある。今後は日本語教育においても学習項目の一つとして取り入れられるよう、使用場面や対人関係においても敬語と比較しながら考察を進めていきたい。

#### 【参考文献】

- 尾崎喜光 (2009) 『しくみで学ぶ！正しい敬語』 ぎょうせい  
菊地康人 (1997) 『敬語』 講談社学術文庫  
国立国語研究所 (2006) 『国立国語研究所報告123 言語行動における「配慮」の諸相』 くろしお出版  
佐竹秀雄・西尾玲見 (2005) 『日本語を知る・磨く敬語の教科書』 ベル出版文化庁 (2010) 「敬語の指針」  
[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai\\_6/pdf/keigo\\_tousin.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_6/pdf/keigo_tousin.pdf)  
塙保己一 (1932) 『群書類従 第二十七輯 雑部』 続群書類従完成会  
宮地裕 (1999) 『敬語・慣用句表現論—現代語の文法と表現の研究 (二)』 明治書院

#### 【国語辞典】

- 北原保雄 編『明鏡国語辞典 第2版』 (2011) 大修館書店  
金田一春彦・金田一秀穂 編『学研現代新国語辞典 改訂第5版』 (2016) 学研  
見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大 編 第二十八『三省堂国語辞典 第7版 小型版』 (2014) 三省堂  
西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 編『岩波国語辞典 第7版新版』 (2016) 岩波書店  
宮地裕・甲斐睦郎 監修 山下杉雄・村上公雄・塩谷善之・大西匡輔 編『精選国語辞典 新訂版』 (2010) 明治書院  
森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一 編『集英社 第3版国語辞典』 (2013) 集英社

年 報 編 (2016年 4月～2017年 3月)

1. 日本語研修コース .....	23
2. 日本語・日本文化研修コース .....	37
3. 日本社会文化プログラム .....	40
4. 全学共通教育 .....	42
5. 留学生指導 .....	43
6. 留学生センター年間行事 .....	54
7. 留学生センター交流ラウンジ .....	65

資 料

岐阜大学外国人留学生数 .....	68
-------------------	----



# 1. 日本語研修コース

## 1.1 集中コース：第40期（2016年4月～9月）

### 1.1.1 スケジュール及び受講者

- 4月12日（火） 開講式
- 4月13日（水） 授業開始
- 7月28日（木） 授業終了

日本語研修コース第40期は従来と同様、初級から中上級の4レベルのクラスを開講した。ここに、学内公募による留学生18名（うち研究生8名、大学院修士課程3名、大学院博士課程2名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生・特別研究学生）5名）、及び留学生センター所属の留学生6名（日本社会文化プログラム）の計24名が受講することになった。

プレイスメントテスト及び面接の結果、Aクラス（初級レベル）が5名、Bクラス（初中級レベル）が5名、Cクラス（中級レベル）が9名、Dクラス（中上級レベル）が5名となった。

### 1.1.2 各クラスの時間割と受講者・授業報告

[Aクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語A [石井]	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [富田]	総合日本語A [野原]	口頭表現A [田辺]
2	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [城戸]	総合日本語A [石井]	総合日本語A [三輪]	総合日本語A [田辺]
3	総合日本語A [野原]	文章表現A [吉成]		総合日本語A [村田]	

授業報告（Aクラス担任：吉成）

今学期は、まったく初めて日本語を勉強する人はおらず、一般A1で勉強したことがある人、母国で日本語を学習したことがある人などの5名（協定校からの学部所属の交換留学生1名、学内公募の研究生4名）が受講した。受講者の国籍は、中国（2）、バングラデシュ、タイ、ドイツであった。「総合日本語A」では8名の教員によるティーム・ティーチングによって授業が進められ、日本語初級文法を学ぶ。『みんなの日本語I・II』（スリー

イーネットワーク)を使用し、各課の新出語、文型をドリル練習や文作、会話など口頭練習を中心に授業が行われる。学生には授業外での予習・復習を求め、新しい課に入る際には予習内容を確認する文法・語彙の予習クイズを、学習した文法項目の理解度を確認するための文法復習テストを6回実施した。また技能科目として、まとまった文章を書くための作文のクラス「文章表現A」、日常会話を学ぶ「口頭表現A」がある。前年度まで、コンピューターの基本操作(日本語入力の仕方、インターネットを使用した自律学習法、発表用ソフトの利用など)を学ぶ「パソコン演習」の授業があったが、パソコンや発表用ソフトの基本的な操作は周知の学生が多くなったため、この時間を総合日本語に組み込むことにし、かな漢字入力の活動のみ、授業内で取り入れることにした。

母語が様々であったため、共通言語である日本語を使ってコミュニケーションをとろうとし、休み時間でも学んだ文型を使って積極的に会話練習をしていた。クラスの雰囲気もよく、躊躇なく日本語で話す姿勢が身についていた。だからといって文法を無視した単語を並べただけのいい加減な表現ではなく、正しい日本語で話そうとしている姿がとてもよかった。成績は様々であったが、お互いに学習を助け合い、それぞれの日本語力を高めていったように思う。

## [Bクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B [富田]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [六郷]	総合日本語B [橋本]
2	聴解演習B [富田]	口頭表現演習BC [橋本]		口頭表現B [六郷]	文章理解B [村田]
3				文章表現B [三輪]	

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告 (Bクラス担任：橋本)

Bクラスは初中級レベルの受講生5名(学内公募の研究生4名(中国3、バングラデシュ1)、協定校からの交換留学生1名(オーストラリア1))で、小さなクラスになった。9月の修了判定の結果、5名全員が修了した。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまで初級文法を正確に使いこなすことを目標とする。

Bクラスでは、初級文法が十分身につけていない学生がいることを考慮し、初級文法復

習（活用中心）を行ない、その後『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行なった。また、文章表現Bでは、習った文法項目の短文作成練習を行い、正確な文作成を目指した。また口頭表現については、モノローグ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

今期のBクラスは、学生が5名と少ない人数であったこともあり、丁寧に進めることができた。自発的に発言する学生が多く、積極的に日本語を使おうとする努力が見られた。課題にも積極的に取り組み、質問も多く出て、活発なクラスになった。

### [Cクラス]

時間割：総合日本語Cは必修、技能科目は選択。合計10科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語C(演習) [吉成]	総合日本語C [六郷]	漢字・語彙 [吉成]	総合日本語C [吉成]	
2	聴解演習C [石井]	口頭表現演習BC [橋本]	総合日本語C(文法) [橋本]	文章理解C [村田]	
3	総合日本語C [石井]	文章表現C [城戸]		口頭表現C [田辺]	

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

### 授業報告（Cクラス担任：吉成）

受講者は中級前期レベルの学習者9名（日本社会文化プログラム学生3名、協定校からの学部所属の交換留学生1名、学内公募の修士課程学生2名、研究生3名）、国籍は中国（6）、タイ、アメリカ、韓国であった。「総合日本語C」の月・火・木曜日の3コマで『中級を学ぼう（中級前期）』（スリーエーネットワーク）を中心に、各担当が作成する副教材を使用しながら、中級文法項目を学習し、読解や作文などを行なった。毎週水曜日の「総合日本語C（文法）」は教科書から離れ、日本語能力試験N2程度の文法項目を学ぶ時間とした。毎週月曜日の「総合日本語C（演習）」は日本人学生との合同授業で言語学の基礎知識を学びながら、「読む・聞く・話す・書く」活動を通して日本語力を高める演習の時間とした。技能科目として6科目が用意され、受講者は少なくとも5科目を選択することになる。

学期はじめから、クラス内で日本語力に差があることがわかっていたので、教科書も先学期は中級中期の教科書を使用していたが、中級前期のものを使用することにし、全体の授業内容のレベルは下げたものの、間違いなく正しい日本語で話す・書くことができるこ

とを目標とした授業を行った。日本語能力試験のN2やN1に合格しているという学生でも話したり、書いたりすることは得意ではない学生も多く、結果的に全員にあった授業内容だったと思う。

今学期から、宿題を提出する前に、ラウンジコンピューターに日本語チェックを受けることを課した。授業で学んだ中級文法の文型を使って短文を作成する宿題だが、第一回の宿題を回収したところ、文型の使い方以前に、間違った漢字・助詞・単語の使用が多く、初級レベルのミスが散見された。日本人と話す機会も少ないという彼らにとって、ラウンジコンピューターと強制的ではあるが話す機会を持たせることにも意義がある。また、その場で自分の間違いを指摘され、訂正することも重要であると考え、この活動を行った。宿題は8課分あったが、初級のミスがなくなったため、学生が文型のどの点を理解していないのかがよくわかった。教師の修正箇所も明白に伝わるようになったのではないだろうか。またコンピューターチェックをしないで提出する学生もいたが、その違いは明らかだったので、再提出させることもあった。それにより、自分の初歩的な間違いに気づくこともできたと思う。宿題のチェックはラウンジコンピューターのほうが大変だったと聞いたが、留学生にとっては日本語学習のためだけでなく、ラウンジコンピューターと話すよききっかけになったようだ。中級レベルの学習者だからこそ、今後も続けていきたいと思う。

## [Dクラス]

時間割：総合日本語Dは必修、技能科目は選択。合計7科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D [河合]		総合日本語D [石井]		総合日本語D [村田]
2	口頭表現D [石井]	聴解演習D [六郷]		総合日本語D [野原]	
4		文章理解D [太田]			

授業報告（Dクラス担任：土谷）

本学期のDクラス受講者は、5名（日本社会文化プログラム学生3名、協定校からの学部所属の交換留学生1名、学内公募の研究生1名）で、国籍は韓国、中国（4）であった。人数が少なく、受講生の国籍のバラエティにも乏しかったため、授業の運営が難しいかと懸念したが、実際には受講者それぞれが活発に意見を出し合うチームワークにも優れているクラスで、教員にとってもやりがいがあった。

学生の日本語レベルについて言えば、4月に新規に来学した4名と、前学期Cクラスを

受講して今学期Dクラスに進んだ1名との間に若干のレベル差があったが（前者のほうがレベルが高い）、これは現在の日本語研修コースの設計上、仕方のない面がある。しかし、全員出席や宿題提出に全く問題なく、気持ちの良い1学期を送ることができた。

本クラスの学生には、留学生センターのかかわる各種行事への出席を奨励したが、それぞれにも積極的に参加した（5月11日（水）郡上踊りワークショップ、7月13日（水）能楽ワークショップ、7月15日（金）地域協学センター平成28年度第3回ぎふフューチャーセンター「国際交流機会の増加をめざして、郡上の魅力を考えよう」(留学生センター協力)）。

## 1.2 一般コース

4月13日（水） 授業開始

7月28日（木） 授業終了

### [科目名と受講者]

クラス名(レベル)	科目名	受講者数
一般A 1（入門）	総合日本語A 1	13
一般B（初中級）	総合日本語B	13
	聴解演習B	
	文章理解B	
一般C（中級）	総合日本語C（演習）	8
	総合日本語C（文法）	
	聴解演習C	
	文章理解C	
	漢字・語彙	

### [時間割]

		月	火	水	木	金
1	一般A 1	総合A 1 [野原]				
	一般B			総合B [橋本]	総合B [六郷]	総合B [橋本]
	一般C	総合C(演習) [吉成]		漢字・語彙 [吉成]		
2	一般A 1			総合A 1 [富田]	総合A 1 [田辺]	
	一般B	聴解演習B [富田]				文章理解B [村田]
	一般C	聴解演習C [野原]		総合C（文法） [橋本]	文章理解C [村田]	
3	一般A 1					総合A 1 [河合]
	一般B					
	一般C					

## 授業報告

一般コースは、専門の授業を中心に受講し、空いている時間に日本語を勉強する学生を対象としたコースで、初級（A1、A2）、初中級（B）、中級（C）の3レベルを設定しているが、初級後半に当たるA2クラスを受講する学生が例年少ないため、A2クラスを開講せず、未習者を対象に週4コマで初級文法を終了するクラス（A1）を開講した。

今学期は、学内公募による留学生34名（うち研究生8名、教員研修生1名、大学院修士課程17名、大学院博士課程6名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生・特別研究学生）2名）が受講することになった。プレースメントテスト及び面接の結果、一般A1クラス（日本語未習者対象）が13名、一般Bクラス（初中級レベル）が13名、一般Cクラス（中級レベル）が8名となった。なお、一般A1クラスのみ、この一般コースを取る学生単独の科目となっているが、一般B・Cクラスは集中コースと共通に開講される科目となっている。

初級レベル（A1）は文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多いことから、先学期から機能シラバス、場面シラバスのような形で（文法練習を中心にせずに）一つ一つの授業で学習項目が完結する授業を行なっている。教科書として使っている『にほんごではなしましょう』（らんぐ）は教材にローマ字を併記しており、文字学習をせずに学習を進めることができると考えたが、先学期末に行なったアンケートで文字学習への要望が多数あったので、今期は少しずつ文字練習も行なうことにした。

初中級以上のレベルになると、初級をどのように学習したかで学生のレベルに差が生じる。特に、集中コースのAクラスで半期15コマで集中的に学習した学生と、一般コースで初級を学習した学生とでは、理解力とはもかく、口頭能力に大きな差が生じている。その差を埋めるだけの口頭能力の養成は、一般コースでは難しいので、クラスでは初中級レベルの文法項目の学習・理解に留まっているのが現状である。

初中級クラス、中級クラスは、集中コースの授業から総合日本語、技能クラスの一部を受講する。専門の授業で忙しい中、受講生は熱心に授業に参加していた。

### 1.3 集中コース：第41期（2016年10月～2017年3月）

#### 1.3.1 スケジュール及び受講者

- 10月7日（金） 開講式  
10月11日（火） 授業開始  
12月23日（金）～1月9日（月） 冬季休暇  
2月10日（金） 授業終了

日本語研修コース第41期は従来と同様、初級から中上級の4レベルのクラスを開講した。ここに、学内公募による留学生23名（うち研究生22名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）1名）、及び留学生センター所属の留学生5名（うち日本語・日本文化研修コース4名、日本社会文化プログラム1名）の計28名が受講することになった。

プレイスメントテスト及び面接の結果、Aクラス（初級レベル）が9名、Bクラス（初中級レベル）が5名、Cクラス（中級レベル）が4名、Dクラス（中上級レベル）が10名となった。

#### 1.3.2 各クラスの時間割と受講者・授業報告

##### [Aクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語A [村田]	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [石井]	総合日本語A [三輪]	口頭表現A [田辺]
2	総合日本語A [富田]	総合日本語A [六郷]	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [六郷]	総合日本語A [田辺]
3	総合日本語A [野原]	文章表現A [吉成]		総合日本語A [田辺]	

授業報告（Aクラス担任：吉成）

初めて日本語を学習する人だけでなく、自学学習あるいは大学の授業として勉強したことがある人など、学習経験は異なるが初級学習者でまとめられる9名（日本社会文化プログラム学生1名、学内公募の研究生8名）が受講した。受講生の国籍は中国（4）、インドネシア（2）、バングラデシュ、ベトナム、アメリカであった。前期と同様、ティーム・ティーチングによる「総合日本語A」の授業を中心に初級文法を学び、「文章表現A」では作文を、「口頭表現A」では日常会話を学ぶ。

熱心な学生が多く、学期当初は授業の出席率も全般的によかった。宿題の提出等もまじめにこなしていた。前学期から再開した予習クイズ（その日に習う課の語彙と文型を確認する10問ほどの小テスト）の実施も含め、予習を前提としていたが、まじめに取り組んでくる学生とそうでない学生とに分けられ、その点が成績の差にはっきりあらわれた。

クラス全体としては、まとまりもよく、授業を行う上で特に問題はなかった。しかし、大学院入試を控えた研究生6名のうち、4名が院試の1週間前から授業に全く来ないという事態が起きた。前もって相談があった人もいれば、無断で欠席を続ける人など様々ではあったが、結局、この期間の欠席も含め、学期中全体の出席日数が足りず修了できなかった学生が1名いた。研究生にとって大学院入試が重要なことは充分理解できるが、日本語授業もきちんと出席し、院試に合格する学生もいる。今後このような事態が起きないように、指導教員とも連絡をとりあい、状況を把握して今後の授業計画を考えていきたい。

### [Bクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B [富田]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [六郷]	総合日本語B [橋本]
2	口頭表現B [橋本]	口頭表現演習BC [橋本]	文章表現B [富田]	聴解演習B [野原]	文章理解B [秋山]
3					

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

### 授業報告（Bクラス担任：橋本）

今期のBクラスは初中級レベルの受講生5名（学内公募の研究生5名（中国5））であった。2月の修了判定会議の結果、5名全員が修了した。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまで初級文法を正確に使いこなすことを目標とする。

Bクラスでは、初級文法が十分身につけていない学生がいることを考慮し、初級文法復習（活用中心）を行ない、その後『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行なった。また、文章表現Bでは、習った文法項目の短文作成練習を行い、正確な文作成を目指した。また口頭表現については、モノログ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動

や会話練習などを行なった。

今期のBクラスは、学生が5名と少ない人数であったこともあり、丁寧に進めることができた。課題にも積極的に取り組み、質問も多く出て、活発なクラスになった。

### [Cクラス]

時間割：総合日本語Cは必修、技能科目は選択。合計10科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語C(演習) [吉成]	総合日本語C [六郷]	総合日本語C [吉成]	総合日本語C(文法) [野原]	総合日本語C [秋山]
2	聴解演習C [野原]	口頭表現演習BC [橋本]	文章理解C [石井]	口頭表現C [田辺]	文章表現C [村田]
3	漢字・語彙 [吉成]				

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

### 授業報告（Cクラス担任：吉成）

中級前期レベルの学習者4名（協定校からの学部交換留学生1名、日本語・日本文化研修留学生1名、学内公募の研究生2名）が受講した。受講者の国籍は中国（2）、オーストラリア、韓国であった。少人数で、科目によっては2名だけの授業などもあったが、クラス内の雰囲気はよく、口の重い学生が陽気な学生につられて話すようになるなど、それぞれの個性が互いにいい影響を与えていた。

提供する科目数、「総合日本語C」（火・水・金）の授業内容等は、ほぼ前期と同様である。前期と比べ人数が少なかったことから、学生一人一人に目が配れたことはよかった。まじめに課題に取り組み、授業後もほぼ毎日ラウンジチューターと一緒に勉強していた学生は、この学期でかなり日本語力が向上した。非漢字圏の学生であったが、漢字テストでは漢字圏の学生よりもいい点数が取れていた。動機の高さと積極的な学習態度が言語習得には重要であることがよくわかった。その一方、慢心していたと思われる学生は遅刻や欠席も多く、学期を通して伸びたと言える点が見当たらなかった。

大学院入試も控える研究生にとって、日本語を学ぶ目的は日本語でコミュニケーションが取れるようになるためだけでなく、正しい日本語を話す・書くことも重要である。しかし、その意識が低く、まじめに日本語学習に取り組む姿勢から問い正さなければならない時もある。中級レベルだからこそ、なぜ日本語を学んでいるのかを考えて、学習意欲を持って日本語授業に取り組んで欲しい。

[Dクラス]

時間割：総合日本語Dは必修、技能科目は選択。合計7科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D [野原]	総合日本語D [石井]	文章表現D [土谷]	総合日本語D [土谷]	総合日本語D [村田]
2				文章理解D [三輪]	口頭表現D [橋本]
3		聴解演習D [石井]			

Dクラスには日本語・日本文化研修コースの学生（以下日研生）が含まれるが、日研生は上記以外に日研生専用科目を受講する。詳細は第2章を参照のこと。

授業報告（Dクラス担任：土谷）

本学期のDクラス受講者は、8名（日本語・日本文化研修留学生3名、学内公募の研究生5名）で、国籍はスウェーデン、タイ、中国（6）であった（学期途中までは全10名だったが、個人的な事情で2名が中途退学により履修放棄）。これに加えて、先学期Dクラスを履修した日本社会文化プログラム学生1名が、技能科目のみを履修した。

本学期は、学生についてというより、Dクラスの設計について考え込まざるを得ない事態となった。日本語・日本文化研修留学生（日研生）以外の学生がすべて、地域科学部の中国人研究生という極端な偏りを見せた。以前からその傾向はあったが、これほどあからさまになったのは、Dクラスでは初めてである。理由として考えられるのは、①地域科学部で中国人研究生を積極的に取っている、②同学部以外の外国人留学生にとって、Dクラスレベルの日本語は必要ない（もしくは取る余裕がない）、の2点である。

理由①については、そのような戦略を意図的に取っているのであれば問題ではないだろうが、研究生の国籍や学部の偏りは、注視していく必要があると思われる。理由②については、一般A1クラスの現状と併せて考えたい。一般A1クラスを文型積み上げではなく文字も必須としない授業としたところ、受講者が激増している。彼らは、研究は英語で行い、日本語はごく初歩的なレベルのものに、プレッシャーなく楽しく触れられれば満足なのではないかと推察する。Dクラスはその対極にある。このレベルまで達する必要はなく、また試験や宿題の多い授業を取る必要も余裕もないというのが、本学の多くの留学生の実状かもしれない。

Dクラスを現システムのまま維持することもできるが、上記及び他の要因により、次年度は「集中Dクラス」を廃止し、「一般Dクラス」を設置する予定である。一般Dクラスになると、必修科目数はなくなり（集中Dは必修7科目で、これだけの時間を取れない学生

が受講を諦めている実例がある)、1週間に1回でもいいから日本語の授業を取りたいという中上級学生の要望を満たすことができる。現在一般クラスの最上レベルの一般Cクラスには、このような学生が滞留し、同クラスの運営を難しいものになっている。次年度一般Dクラスを試行し、どのような効果・弊害が出るかを確認していきたい。

また、もう1点次年度持越しで検討しなければならないのは、部局間協定校からの交換留学生の日本語研修コースの受講の可否である。部局間協定は、当該部局が自部局の研究・教育のために結ぶもので、それに拠って受け入れた留学生の指導を、その協定とは無関係の留学生センターが担うべきなのか、検討が必要である。

本学期のDクラスの学生は、真面目さには太鼓判を押せるが、活発とは言い難かった。発言も少なく、現代社会についてトピックを扱ってもそれに対する興味が希薄なようで、教員が肩透かしを食らうような場面もあった。しかし、教員は他の学期のクラスと今学期のクラスを比較して考えてしまうが、受講生はこのクラスしか知らないわけで、彼らがこのクラスで学べて良かったと思っているのであれば、それはそれでいいのかもしれない。いろいろな点で考えることの多い学期であった。

### 1.4 一般コース

10月11日（火） 授業開始

12月23日（金）～1月9日（月） 冬季休暇

2月10日（金） 授業終了

#### [科目名と受講者]

クラス名(レベル)	科目名	受講者数
一般A 1（入門）	総合日本語A 1	17
一般B（初中級）	総合日本語B	15
	聴解演習B	
	文章理解B	
一般C（中級）	総合日本語C（演習）	13
	総合日本語C（文法）	
	聴解演習C	
	文章理解C	
	漢字・語彙	

#### [時間割]

		月	火	水	木	金
1	一般A 1			総合A 1 [富田]	総合C（文法） [野原]	
	一般B			総合B [橋本]	総合B [六郷]	総合B [橋本]
	一般C	総合C（演習） [吉成]				
2	一般A 1	総合A 1 [村田]	総合A 1 [石井]			
	一般B				聴解演習B [野原]	文章理解B [秋山]
	一般C	聴解演習C [野原]		文章理解C [石井]		
3	一般C	漢字・語彙 [吉成]				総合A 1 [秋山]

#### 授業報告

一般コースは、専門の授業を中心に受講し、空いている時間に日本語を勉強する学生を対象としたコースで、初級（A 1、A 2）、初中級（B）、中級（C）の3レベルを設定しているが、初級後半に当たるA 2クラスを受講する学生が例年少ないため、A 2クラスを

開講せず、未習者を対象に週4コマで初級文法を終了するクラス（A1）を開講した。

今学期は、学内公募による留学生42名（うち研究生11名、大学院修士課程18名、大学院博士課程11名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生・特別研究学生）2名）が受講することになった。プレースメントテスト及び面接の結果、一般A1クラス（日本語未習者対象）が17名、一般Bクラス（初中級レベル）が15名、一般Cクラス（中級レベル）が13名となった。なお、一般A1クラスのみ、このコースを取る学生単独の科目となっているが、一般B・Cクラスは集中コースと共通に開講される科目となっている。

初級レベル（A1）は文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多いことから、先学期から機能シラバス、場面シラバスのような形で（文法練習を中心にせずに）一つ一つの授業で学習項目が完結する授業を行なっている。教科書として使っている『にほんごではなしましょう』（らんぐ）は教材にローマ字を併記しており、文字学習をせずに学習を進めることができると考えたが、先学期末に行なったアンケートで文字学習への要望が多数あったので、今期は少しずつ文字練習も行なうことにした。

初中級以上のレベルになると、初級をどのように学習したかで学生のレベルに差が生じる。特に、集中コースのAクラスで半期15コマで集中的に学習した学生と、一般コースで初級を学習した学生とでは、理解力とはもかく、口頭能力に大きな差が生じている。その差を埋めるだけの口頭能力の養成は、一般コースでは難しいので、クラスでは初中級レベルの文法項目の学習・理解に留まっているのが現状である。

初中級クラス、中級クラスは、集中コースの授業から総合日本語、技能クラスの一部を受講する。専門の授業で忙しい中、受講生は熱心に授業に参加していた。

## 2. 日本語・日本文化研修コース

### 2.1 第15期（2015年10月～2016年8月）概要

第15期生は、大使館推薦の国費留学生3名（ニュージーランド・カンタベリー大学、フランス・国立東洋言語文化大学、インドネシア・スラマン大学）、大学推薦の国費留学生3名（タイ・カセサート大学、中国・江南大学、スウェーデン・ルンド大学）、私費留学生4名（各大学との交流協定による交換数の枠内で、スウェーデン・ルンド大学、中国・広西大学、オーストラリア・シドニー大学、韓国・木浦大学）の合計10名だった。

#### 第15期 履修／修了生（アルファベット順）

バークベックジョーンズ・トビー（Birkbeck-Jones Toby）

ニュージーランド・カンタベリー大学

デスクスト・シャルル（Descoust, Charles-Etienne Jean）

フランス・国立東洋言語文化大学

ジョンソン・エミル（Jonsson, Emil Patrick）

スウェーデン・ルンド大学

李 琪琪（Li, Qi Qi）

中国・広西大学

ン・テレンス（NG, Terence TSZ Chung）

オーストラリア・シドニー大学

サムツキリー・アネチャー（Samuthkiri, Anecha）

タイ・カセサート大学

ソ・ウネ（Seo, Eunae）

韓国・木浦大学

テグ・プラサラ（Teguh, Pulasara）

インドネシア・スラマン大学

王 卉怡（Wang, Huiyi）

中国・江南大学

ウィークlund・シモン（Wiklund, Simon Tor）

スウェーデン・ルンド大学

約1年におよぶ期間中、学生たちは、前半の秋学期に日本語と日本文化の科目を集中的に学び、後半の春学期には日本語と日本文化の授業に加えて、日本人学生と一緒に全学共通教育で開講されている授業を履修した。さらに、郡上市明宝「観光モニターツアー」と「ぎふフューチャーセンター～国際交流機会の増加を目指して郡上の魅力を考えよう～」への参加、そして十二単着装体験・郡上八幡文化体験・郡上踊りワークショップ・能楽ワークショップ・大相撲名古屋場所観戦・土岐市陶芸実作・茶道実習など伝統的な日本文化に触れる機会を数多く持った。

### 2.2 論文作成と発表会

本学の日本語・日本文化研修コースの特色のひとつは、修了論文の作成を重視している

ことにある。第15期生たちは、秋学期を終えて後半の春学期になると、それぞれの興味・関心にしがってテーマを設定し、指導教員のもとで論文の作成に励んだ。今期生は皆、勉学に交流に意欲溢れる学生たちで、教員側も指導することの幸せを感じる日々を過ごせた。それぞれが熱心に取り組んだ結果、水準以上の作品が提出された。

論文提出後の8月7日には、今期で10回目を数える「留学生は“日本”をどう見たか」と題する研究成果の発表会を開催した。例年のごとくJR岐阜駅近くの本学サテライトキャンパスで行ったが、猛暑のさなか、本学関係者のほか多数の市民の参加もあり、充実した発表会となった（発表会の後は、教員・学生ともに安堵感と解放感に浸りつつ、祝杯を交わして喜び合った）。

#### 論文テーマと指導教員

バークベックジョーンズ・トビー (Birkbeck-Jones Toby)

「昔むかしあるところにマオリ族がいました—マオリ族の民話の分析—」

(指導教員：土谷桃子)

デスクスト・シャルル (Descoust, Charles-Etienne Jean)

「人間と塩の関係—ヨーロッパと日本の塩、その信仰と表現の比較から—」

(指導教員：森田晃一)

ジョンソン・エミル (Jonsson, Emil Patrick)

「在日朝鮮語における発音分析—語頭子音の破裂音による比較分析調査—」

(指導教員：森田晃一)

李 琪琪 (Li, Qi Qi)

「日本独特の「マスク文化」—日本が「マスク大国」と呼ばれる理由—」

(指導教員：森田晃一)

ン・テレンス (NG, Terence TSZ Chung)

「キリスト教の視点から見る日本—キリスト教受容の歴史を中心に—」

(指導教員：土谷桃子)

サムッキーリー・アネチャー (Samuthkiri, Anecha)

「日タイにおける障がいのある学生への対応の比較—岐阜大学とカセサート大学におけるサービスを中心に—」

(指導教員：森田晃一)

ソ・ウネ (Seo, Eunae)

「日本における公共広告—時代と公共広告の関係性を探る—」

(指導教員：土谷桃子)

テグ・プラサラ (Teguh, Pulasara)

「なぜスマートフォン・ゲームに課金するのか」

(指導教員：土谷桃子)

王 卉怡 (Wang, Huiyi)

「中国の美容美髪所と日本の理容美容所における問題点と特徴」

(指導教員：土谷桃子)

ウィークルンド・シモン (Wiklund, Simon Tor)

「武士の遺産—新渡戸稲造の「武士道」は日本人若者に生きていますか—」

(指導教員：森田晃一)

### 2.3 履修科目

履修科目については以下の通りである（このほかに選択科目もある）。

必修授業科目、1週間あたりのコマ数（単位数） 1コマ=90分

授業科目	秋期	春期	合計
総合日本語	5 (5)	—	5 (5)
全学共通教育科目	—	2 (4)	2 (4)
日本語読解演習	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語文章表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語発音・口頭表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語聴解演習	1 (2)	1 (2)	2 (4)
現代日本の社会	1 (2)	—	1 (2)
近代化と日本人	1 (2)	—	1 (2)
クロスカルチャー コミュニケーション	1 (2)	—	1 (2)
日本の表象文化	1 (2)	—	1 (2)
地域実見—岐阜に学ぶ—	—	1 (2)	1 (2)
論文指導	—	1 (1)	1 (1)
修了論文	—	(4)	(4)
合計	13 (21)	8 (19)	21 (40)

## 3. 日本社会文化プログラム

### 3.1 受講概要

日本社会文化プログラムは、学術交流協定を結んでいる大学からの交換留学生のうち、日本語、あるいは日本文化を学ぶ希望を持つ学生を留学生センターで受け入れ、総合的な日本語・日本文化教育を行なうために開講したプログラムである。2007年度に開講し、2016年度は第19期となる。本プログラムは5つのコースを設けており（異文化理解コース1、異文化理解コース2、日本文化入門コース、日本社会文化コース1、日本社会文化コース2）、各学生のレベルに合わせてコースを設定している。

#### 3.1.1 第18期（2015年度後期～2016年度前期）

2015年度後期に第18期の3名を迎えた。3名とも留学期間は1年間である。

3名は異文化理解コース2と日本文化入門コースを受講し、所定の単位を取得した。

スタインハワー マシュ トーマス	アメリカ	ノーザンケンタッキー大学	異文化理解コース2、 日本文化入門コース修了
タッタワオン ソラダ	タイ	カセサート大学	異文化理解コース2、 日本文化入門コース修了
コ セツエイ	中国	内蒙古大学	異文化理解コース2、 日本文化入門コース修了

#### 3.1.2 第19期（2016年度前期～2016年度後期）

2016年度前期に第19期の3名を迎えた。うち2名は留学期間は半年間、1名は1年間である。

2名は日本文化入門コースを受講し、所定の単位を取得した。

1名は日本社会文化コース1、2を受講し、所定の単位を取得した。この学生は第15回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会に出場し、優秀賞を獲得した。

ゴ チクケン	中国	江南大学	日本文化入門コース修了
ソ セイビ	中国	江南大学	日本文化入門コース修了
リ カヨウ	中国	電子科技大学	日本社会文化コース1、2修了

### 3.2 社会文化プログラム専用科目

このプログラムでは、日本文化を実践的に学ぶ機会を提供するため、「日本文化へのいざない」という科目を設けている。2015年度前期の「日本文化へのいざない」は、本学客員教授で、茶道江戸千家副家元である川上紹雪氏に茶道に関する講義をお願いした。茶道に関する講義と共に、実際に茶道を体験する機会があり、日本文化理解の入門として、受講生には大変得るものがあった。

## 4. 全学共通教育

### 4.1 概要

留学生センター教員はそれぞれ、岐阜大学全学共通教育科目も担当している。日本語及び日本事情科目、人文科学科目の授業、また日本人学生と留学生の合同授業など、多様な内容・形態の授業を提供している。

### 4.2 2016年度 前学期

科目	授 業 名	時間	担当	備 考
日本語及 日本事情 科目	日本語DⅠ—文章表現—	月3	土谷	日本社会文化プログラム学生も受講
	日本語DⅢ—聴解—	月4	土谷	日本語・日本文化研修生、日本社会文化プログラム学生も受講
	日本事情AⅠ	火4	森田	
人文科学 科目	言語学入門—日本語学入門—	月1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本語口頭表現	火2	橋本	日本語研修コース集中B・Cクラスも受講
	日本近世史—近世都市史—	水2	森田	

### 4.3 2016年度 後学期

科目	授 業 名	時間	担当	備 考
日本語及 日本事情 科目	日本語DⅡ—文章表現—	月3	土谷	日本社会文化プログラム学生も受講
	クロス・カルチャー・コミュニケーション	火2	太田	日本語・日本文化研修生も受講
	日本事情AⅡ	火4	森田	
	日本事情CⅡ	水2	森田	
人文科学 科目	言語学入門—日本語学入門—	月1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本文学—近世文学の世界—	月2	土谷	
	異文化論—多文化関係論—	火2	太田	クロス・カルチャー・コミュニケーションと同時開講
	日本語口頭表現	火2	橋本	日本語研修コース集中B・Cクラスも受講
	日本近世史—近世文化史—	火2	森田	
	異文化論Ⅱ—通過儀礼（人の一年） に見る世界の諸地域—	水2	森田	日本事情CⅡと同時開講

## 5. 留学生指導

本稿では2016年4月から2017年3月までの1年間に留学生指導部門が行なった主な活動をまとめ、以下に報告する。なお、留学生センターが3月初旬に地域科学部・共通教育棟4階に移転したため、その前後、相談に対応できない時期があったことを付記しておきたい。

### 5.1 指導部門の体制

後述する相談には留学生指導担当教員が対応し、大きな問題が起こった時や、相談内容、事柄によっては相談者の指導教員、関連部署の担当者、国際企画課留学生支援系の職員等にも協力を仰ぎながら問題の解決に当たった。留学生・日本人学生とも予約なしに各自の都合で来室するケースは本年度も変わらなかったため、相談者に合わせて適宜対応した。

今年度から恩田裕子氏が事務補佐員として勤務し、センターを訪れる学生に主として(1)修学・履修関係、(2)留学関係、(3)生活関係で対応してくださったため、恩田氏の分も件数に含めた。留学生指導部門との関連では(2)留学関係が多く、相談内容の確認(相談申込書への記入)、面談日時の調整・連絡、相談室への案内、TOEFL等の問題集の貸し出し・返却、留学報告書のファイル等をお願いした。

### 5.2 相談の概要

#### 5.2.1 相談件数とその内容

##### ①留学生からの相談

##### (a)学業関係(106件)

授業・研究関係、単位の不足・研究室の変更等の学業問題・進学・進路関係(学生との面談、科目担当者・指導教員・留学生支援係・学部事務との相談・連絡など)、大学院進学・受験関係(入試の手続き等についての問い合わせ、提出書類・研究計画書等の記入・記入方法の説明、文章のチェック、修了生からの進学関連の問い合わせ、専門分野の教員との話し合い、など)、日本語関係(オリエンテーション、全学共通教育・日本語研修コースの日本語の内容、プレースメント・テストの日程問合せ、など)

##### (b)生活一般(30件)

忘れ物対応、事故への対応、イベント等への参加関係、など

##### (c)経済問題(9件)

授業料免除関係、奨学金関係(奨学金の決定方法に関する不満・質問、各奨学金への申請・手続き、など)、アルバイト、など

(d)住宅・住居問題（7件）

国際交流会館関係（入居・退去問題）、民間のアパート探し、留学生支援係会館担当者との話し合い、など

(e)健康問題（5件）

健康診断関係、インフルエンザ、など、

(f)入管関係（8件）

一時帰国、資格外活動許可に関する質問、家族の呼び寄せ、など

(g)市役所関係（3件）

外国人登録、国民健康保険加入手続き・保険料関係、など

(h)トラブルの相談（21件）

留学生の私的トラブルへの対応、人間関係・研究室のトラブル、など

②日本語研修生・日研生関係（28件）

来日時の説明・諸対応、各種オリエンテーション、弁論大会関係、イベントへの参加、など

③日本人学生からの相談（186件）

留学に関する全般的質問（サマースクールを含む）、協定校等への交換留学の応募から出発・帰国後の勉強・進路等の相談、勉強計画書、トビタテ計画書等、留学中のメールでの諸相談・報告書送付時の返信、学業その他の相談、課外活動の運営・内容に関する諸相談、大学祭・各種イベント関係、サマースクール説明会・事前研修・英語研修関係・諸報告書・サマスク報告書作成・報告会（「私たちの留学の真実」）、など、留学生の紹介依頼、広報関係（生協学生委員会、留学経験者の紹介、など）、危機管理オリエンテーション関係、など

④大学内外関係（118件）

本学学部事務からの問い合わせ（留学生の受け入れに関する相談、大学協定・派遣関係、奨学金関係、日本語コースの受講関連、全学共通教育関係、イベント関係、など）、留学生の紹介依頼、岐大OB・OG関係、危機管理マニュアル、本学国際企画課からの相談・依頼（オープンキャンパス用資料提供、留学経験者紹介、ガイドブック校正、諸資料写真等提供、大学祭着物着付け・いこまいセミナーなどイベント関係、サマースクール派遣全般、チューター関係、留学生のトラブル関係、など）、広報関係、非常勤講師・岐阜大教職員からの相談、他大学からの相談、新聞取材、学研災関連（事故後の対応、保険関係）、など

計 521件

### 5.2.2 相談の特徴

今年度多かった項目は、①日本人学生からの相談、②大学内外関係、③学業関係であり、ここ数年、留学生より日本人学生の来室の方が多く続いている。いずれの相談も面談が複数回に及び、さらにはメールを通しての遣り取りが加わるケースが増えた。減少した項目は前年同様、入管関係、市役所関係、健康問題、住宅・居住問題、経済問題である。ビザの更新、再入国関係、国際交流会館関係などの諸手続きは国際企画課留学生支援係が担当しているからであり、オリエンテーション時にそれぞれの相談内容に対応する部署を案内している効果と言えよう。以下に、相談の特徴、課題等を簡単に記しておきたい。

①では、交換留学に関する相談・帰国後の面談、「トビタテ！留学 JAPAN」や専門分野への留学、留学経験を活かすための進路相談、サマースクール（派遣）全般に関する相談が大半を占め、全学部の日本人学生から相談が寄せられた。中でも、例年との大きな違いは交換留学に関する相談者が急増したことであり、特に「奨学金支給対象となる交換留学」の締切り（本年度は10月21日、各学部の締切は10月初旬）前後には多くの相談が寄せられ、1日に5～6名の相談に応じ、さらにはメールや電話での対応が加わることもあった。ほとんどが協定校が要求する TOEFL の点数に満たない事から派生した相談であり、数度にわたる面談の後、本人の意向を尊重して、1) 志望校やコースの変更、2) 留学出発年の変更、3) TOEFL の再挑戦、という形で解決することが多かった。中でも、1)、2) では TOEFL スコアを伸ばすだけでなく、専門分野や卒論のテーマと関連付けた留学を目指すよういくつかの方法を提示し、目的の明確化とモチベーションの維持が図れるようアドバイスした。TOEFL スコアの不足は、依然として留学の課題となっている。

サマースクール（派遣）には計20名（オーストラリア16名、韓国4名）が参加したが、諸連絡がなかなか徹底せず、返答・返信等が遅れたり事前研修を欠席する学生がいたため、何度も連絡や確認をしなければならず、参加者への対応に多くの時間を費やした（後述）。

交換留学では、2016年7月にはオーストラリア・シドニー工科大学に2名、同・グリフィス大学に1名、8月にはアメリカ・ノーザンケンタッキー大学に1名、タイ・カセサート大学に1名、10月にはドイツ・バイロイト大学に1名が留学したが、出発前には研修をして送り出し、留学中はメールで励ました。また、前年度の交換留学生6名が5月～6月に帰国したので、大学（シドニー工科大学2名）・地域（アメリカ・ウエストバージニア大学2名、ノーザンケンタッキー大学2名）別に面談を行い、各自の留学の報告、意見・提案等を聴取した（後述）。

②の大学内外関係の相談では、8月に留学生支援係2名が異動したため、後任への説明や連絡・打ち合わせ等が増加したこと、今年度初めて保健管理センター主催の「いこまいセミナー」に協力し、1回分のセミナーを担当したため、打ち合わせ・準備等が必要となっ

たこと等が増加の要因として加わった。また、事務補佐員の恩田氏がラウンジチューターの管理やチューター主催のイベント（7月の七夕、1月のお正月の遊び）を担当し、留学生指導担当教員が主に留学報告会（12月14日）、「いこまいセミナー」（1月18日）を担当したが、企画・打ち合わせ・実施の過程で、各部署との遣り取りが生じ、件数の増加につながった。

③学業関係では、大多数が相談者各自の目的に向かっての前向きな相談であったが、少数ながら、研究室・指導教員を巡る問題が履修、進級、卒業などに関わるような相談も持ち込まれた。一度関連部署の担当者に相談したものの、回答に納得できなかったり、どうにか解決の道はないかと期待して相談に来るケースがほとんどだった。指導教員は、留学生が相談に来ていることは知らないことが多く、ほとんどの場合、学業関係の問題が、経済的な問題（特に奨学金の獲得）や人間関係のトラブル等にも繋がっていた。

### 5.3 留学生相談部門としての活動

#### ①新規渡日者に対するオリエンテーション

2016年4月の渡日者に対しては4月20日（水）に、10月の渡日者に対しては10月19日（水）に、日本語・英語、日本語・中国語による生活に関するオリエンテーションを実施した。中国語の通訳は、留学生に依頼し、各学部事務の留学生担当者にも出席を呼びかけた。また、図書館、メディアセンターからも説明があった。既述のように、各自の必要に応じてどこに相談すればよいか対応部局や担当者を丁寧に説明し、ガイドブック等も渡しているため、近年混乱は起きておらず、各部局の分担・連携が取れていると言える。

日本語研修コース、日本語・日本文化研修プログラムのクラス別オリエンテーション、国際交流会館の到着時の説明及びオリエンテーションなどを計画通り行なった。また、本年度は12月7日（金）に大規模な全学部合同防災訓練が実施されたため、国際交流会館の防災訓練もこれに合流した。

#### ②留学報告会

留学報告会「私達の留学の“真実”」を、12月14日（水）に実施した。交換留学（アメリカ：ウエストバージニア大学1名、ノーザンケンタッキー大学2名、オーストラリア：シドニー工科大学2名）、サマースクール（オーストラリア：グリフィス大学3名、韓国：木浦大学1名）など、様々な方法により海外で学んだ留学経験者9名が、パワーポイント等を使いながら各自の体験を詳細に発表してくれた。また、今年度はサマースクールと工学部の短期留学の両方に参加した学生2名にも発表を依頼したが、両者の比較・意義などを含んだ楽しい報告をしてくれた。さらに、私費でアメリカのノースシアトルカレッジに留学した1名からも貴重な報告があった。

昨年の反省を踏まえ、今年は人数を減らして各自の体験をじっくり話してもらうことにし、受付や司会を担当してくれたグリフィス大学サマスク参加者4名とも事前に十分な打ち合わせを行った。参加者は42名だったが、次年度の交換留学やサマスクへの参加を希望している学生等が、活発に質問し合い交流の時間を盛り上げてくれた。帰国学生が提出した報告書（留学の長所・短所、費用、語学レベル、出発までの流れ、留学先でのある一日、生活・活動環境、コメントなど）をまとめた小冊子を、参加者に配布した。

水曜日に授業のある学部が増え、イベントがかち合うことも多いため、年々参加者を集めることが難しくなっており、日時の設定や広報の仕方が課題となっている。また、工学部、応用生物科学部もそれぞれに留学報告会を開催しているが（今年度は案内が徹底しているわけではなかった）、留学の促進のためには、大学全体として各留学報告会をどう位置付けるのか／纏めるのか、どのように広報していくのか等を検討していく必要がある。

### ③交換留学生（日本人）に対する事前研修と帰国後の面談

既述のように、今年度交換留学に出発した日本人学生は6名（アメリカ1名、オーストラリア3名、タイ1名、ドイツ1名）であり、7月、8月、10月に1年間の留学に出発した。出発前には事務の担当者とともに事前研修を実施し、危機管理セミナーにも出席してもらって注意を促したが、途中で担当者の異動があったため、ドイツに留学した1名に関しては渡航直後に資料等を送付して対応するという事態が生じた。事務担当者の中で出発日の確認と事前研修の実施に関する申し渡しができていなかったことが悔やまれるが、本人は毎月きちんと報告書を送付してくれている。派遣学生に関しては留学中にもメールで相談に乗った他、月一度の報告書提出時には、返信し励ましの言葉を送った。また、本年度帰国した学生6名全員とは面談して留学中の生活について聞き取りを行った。アメリカへ留学した3名はサマースクール英語研修の講師を引き受けてくれたが、留学経験が活かされたことを嬉しく思っている。

### ④サマースクール説明会と事前研修

4月20日に開催された本年度の「留学フェア」には、66名の参加があった。私自身はグリフィス大のサマースクールについて説明した他、個別の質問・相談等に対応した。ソウル科技大はすでに締め切りが過ぎていたためAIMSで募集したが、この時点で木浦大からは開催の連絡がなかった。

さらに4月27日（11名参加）、5月11日（14名参加）の両日に、グリフィス大のみの説明会を実施した。生協、支援係からの説明の他、前年度の参加者2～3名が体験談を語ってくれ、有意義な説明会となった。しかし、既述のように20名分のJASSOの奨学金を獲得していたにもかかわらず応募者が満たず、その後も工学部大教室のクラスでチラシを配布するなど種々の募集を試みたものの、参加者は16名にとどまった。

ソウル科技大には3名の応募者があったが、1名採択されただけだったのでがっかりしていたところ、5月に入って1名の追加採択があり、最終的に2名参加した。ソウル科技大のサマスクは本学のテスト期間中に開催されるため参加が難しい上、参加人数が定まっていなことも問題の一つである。

木浦大からは同校の募集期間が過ぎてから要項が届き、急遽 AIMS で募集して2名を派遣した。毎年、募集要項が送付されてくるかどうか不明であり、募集時の問題となっている。

今年度は、参加者決定直後に、工学部グローバル化推進室の川瀬真弓先生の協力を得て面談を開始し、3回で木浦大2名、ソウル科技大1名を除く全参加者と会い、サマスクへの目的や意気込み等を確認し、語学研修への参加も促した。参加者と個別に話せた点は良かったが、6月の時点でサマスクをきちんと把握している参加者は皆無だったため、面談での質疑応答はきれいごとにと終わってしまったという印象を持っている。出発直前の各種研修とも合わせ、面談の日時・位置付けを考える必要がある。

英語研修は、6月16日～7月14日までの5週間、週3回（月曜日、水曜日、木曜日、1回2時間）計14回実施した。講師はパルムロース・ティム君（地域科学研究科M2、日本語・日本文化研修コース修了後、 Lund 大学卒業）、リー・ダミンさん（シドニー工科大学からの交換留学生）、伊藤亜貴さん（教育学部4年、ノーザンケンタッキー大学に留学）、祖父江奈緒さん（教育学部4年、ウエストヴァージニア大学に留学）、大竹満琴さん（教育学部4年、ノーザンケンタッキー大学に留学）、紀平一真君（工学研究科M2、インペリアル・カレッジ・ロンドンに短期留学）の6名にお願いした。講師会では14回分の内容と担当者を決め、工学部の短期留学参加者にも声をかけた。工学部グローバル化推進室の川瀬先生と久世恵美子さんも研修に参加してくださり、尽力いただいた。後半は参加者が固定してしまった感があるが、毎回 Reflection Paper を配布して授業に反映させるなど、講師陣の努力も大きく、工学部の短期研究留学参加者も活発でよい影響を与えてくれたと感じている。巻末に英語研修のアンケートを付記した。いつものことながら、参加回数が少ない学生の方が、研修の全体を把握しないままに勝手な意見を書いているという印象を持っている。

7月6日には3校の全参加者それぞれに対して事前研修を実施し、生協、事務、派遣担当教員からの諸連絡・アドバイスをを行い、前年度の参加者からも全般にわたるアドバイスを受けて出発に備えた。続いて、15時から「危機管理オリエンテーション」（講師は海外留学生安全対策協議会服部誠氏）を実施したが、両方に欠席した学生がいたため（何人かは連絡も無しに）、個別に対応した他、8月4日にも欠席者、リーダー（グリフィス大は昨年度の反省を踏まえ、4人体制にした）を中心とした会合を持った。各大学でのサマースクー

ルについては、『岐阜大学夏期短期留学2016』（報告書）を読んでいただきたい。

### 5.3 今年度をふり返って

今年度も多岐にわたる相談が寄せられたが、2月には警察も絡む事件（女子留学生がストーカーまがいの行為に遭遇）に関わることになった。女子留学生の安全を図りながら（友人宅に泊まったり、友人に泊まってもらったり）、警察や不動産屋、家主、留学生の友人等と密に連絡を取り合い、支援係と連携して事件発生から1週間以内に国際交流会館への引っ越しを敢行して解決にこぎつけた。国際交流会館に空きがあったことが幸いしたが、指導教員は解決後に話を聞いたようで協力はなかった。本学の場合、指導教員は何も知らない／しないというケースが度々見受けられるが、留学生を受け入れるのならそれなりの覚悟がほしいと感じている。

また、今年初めて関わった「いこまいセミナー」では、1月18日（水）に「あなたの常識、私の常識～留学生と話しませんか～」というタイトルで、セミナーを開催した。当日は28名の参加者があり、日本人・留学生も半々だったので、5～6名ずつのグループに分かれ、犬やカエルの鳴き声などの擬音の違いを楽しんだ後、クリスマス、お正月、バレンタインデーが各国ではどんな日かを話し合い、発表した。英語だけで話し合いをしたグループもあったが、参加者全員が積極的でこれまでになく楽しい文化交流の時間となった。

今年度で私の任務は終了となるが、留学生・日本人学生との様々な出会いや忘れられない交流ができたことは、何ものにも代えがたい宝である。今後も、留学生・日本人学生が大きな問題に遭遇せず、相互に有意義な交流を持ち、楽しい時間を共有してほしいと願っている。

## 2016年度短期留学（サマースクール）語学研修アンケート （グリフィス大学）

《アンケート回答率100%》 回答者数：16人（参加者数：16人）

### 1. 事前研修に参加した回数について

参加回数

0回1人、1回3人、3回2人、5回2人、6回1人、7回3人、9回1人、13回3人

### 2. 参加できなかった理由（1で参加回数、3回以下の方）

- a 授業・ゼミ等があった 3人
- b サークル活動があった 4人
- c アルバイトがあった 2人
- d その他 3人

- ・レポートの提出に追われていた

- ・自動車学校があった

- ・週2回の実験レポートの提出が大変だったため

3. 研修の開催期間は？

- a 適切 15人
- b 不適切 1人

bと回答された方で、具体的な意見があれば記入してください。

- ・教育課程のある日程にかぶらせないでほしい。

(注：事前にも説明しているが、日程は参加者全員にアンケートを取り、参加人数の多い日を選定した。アンケートに返信しない学生もいた。)

4. 研修時間は？

- a 長い 5人
- b 短い 1人
- c ちょうど良い 10人

5. 講師について？

- a 良かった 14人
- b あまり良くなかった 1人
- c 悪かった (理由は無記入)

研修内容は？

- a 良かった 12人
- b 悪かった 1人
- c その他 2人
- 無記入 1人

bまたはcと回答された方は、具体的な内容を記入してください。

- ・お店、ホストマザーとの日常会話について何かアドバイスがほしかった。自己

紹介は最初しか使えなかったし、ルールは向こうで覚えれば良いと思った。会話の話し方とかナチュラルな返事の仕方など、本当に簡単そうで知りたいことがあったため、そういった事を教えて頂けたらとてもうれしかった。

- ・ とりあえず英語を話してみよう感があったが、日本人同士で未熟な英語を話すことに抵抗と恥じらいがある。それよりも留学先で役立つ言い回しであったり、困った時にどうすれば良いのか、という内容についてやってほしかったと思う。
- ・ 日常で役立つ会話表現などをもっと知りたかった。
- ・ 英語での自己紹介（プレゼン）は非常に良い企画だと感じた。ただ、そのプレゼンに対してのフォローが少ないと感じた。具体的に、英語でのプレゼンは語学留学中でもすることになるため、プレゼンで使えるフレーズ、接続詞、body language の使い方などをもっと知りたかった。事前研修でどこまでのレベルを求めるかどうかは分からないが、ただプレゼンをするだけでは苦になるだけだったかもしれない。学生からの質問も積極的である必要があると感じた。
- ・ 会話練習について、もう少しトピックを簡単に、また時間をしっかり区切ることが重要だと思った。例えば、「昨日なにをした?」、「今週末の予定は?」などの簡単な日常会話のやり取りを3分程度行い、ペアを変えて再度行うというメリハリがあった方がよいと感じた。
- ・ ほかの何人かの学生の意見を聞いたところ、「日常会話」に焦点を合わせた講義形式（ただ聞いて、ただ板書を書く授業ではなく）の方がよかったという声を聞いた。
- ・ ある一つのことを「英語」で説明するというゲームは非常に良いと感じた。頭の体操になるほか、Listening、Speaking の練習になる。

（注：取り上げてほしいトピックなどは口頭または毎回回収した reflection paper に書くよう常に伝えたのだが、実際は要望が出されず、上記は単発で参加した際の感じ方またはサマスク体験後の感想から出た意見だと思われる。）

## 6. 事前研修は、有意義だったか？

a 有意義だった。 14人

a と回答された方で、意見があれば記入ください。

- ・ 参加者は少ないが、講師の留学経験の話や、生の発音が聞いたことが留学する前の良い勉強になった。
- ・ 英語で話す経験はとてもためになりました。

- ・英語に慣れておくことはサマースクールにおいて有効だった。
- ・英語をしゃべる機会が与えられただけでも十分。
- ・ゲーム形式でゆったりして楽しみながら出来た。
- ・「英語に慣れる」、「他文化について知る」という観点では、非常に有意義だったと感じた。私が参加した研修の中で、「Homestay」については非常に印象的で、使えるフレーズやマナー等を学べた良い機会でした。
- ・普段の生活で英語を話す、聞く機会がなかなかないので、良い機会だと思いました。マナーなどを事前に知ることが出来たのも良かったです。

b 思わない。 1人

bと回答された方は、どうしてそう思うか具体的な意見があれば記入ください。

- ・あまり参加出来なかったため、有意義ではなかった。

無記入 1人

#### 7. 事前研修の必要性について

a 継続して行った方が良い 15人

b 実施しなくても良い（必要がない） 1人

bと回答された方は、どうしてそう思うか具体的な意見をご記入ください。

- ・（回答6と同じ）とりあえず英語を話してみよう感があったが、日本人同士で未熟な英語を話すことに抵抗と恥じらいがある。それよりも留学先で役立つ言い回しであったり、困った時にどうすれば良いのか、という内容についてやってほしかったと思う。

（注：上記は1回しか参加しなかった学生の意見である。）

#### 8. サマースクールの実施にあたり、現行の開催大学以外で参加したい国や大学等について、希望や提案があれば記入してください。

- ・イギリスへの留学を提案します。
- ・他にどこがあるか把握していないが、カナダなども良いと思う。また出来たら海外ボランティアの実施に大学のサポートがあると、勉強ではないが異文化の現状を知る上でよい勉強になると思う。
- ・海外ボランティアなどもやりたい。
- ・カナダ
- ・来年の夏休みにまたどこかに留学に行きたいと考えている。指導教員が、Griffith University との窓口をやっているので、また留学について相談したいと思っています。

ますが、具体的な国や大学は特に希望はないです。

9. 事前研修全体を通して、意見・提案等なんでも結構ですので記入してください。

- ・ 諸事情があったり、たったの3回しか参加出来ませんでした。有意義な時間でありました。留学経験もなく、英語で話をするといったことをほとんどしたことがなかったので、自分のレベルがどのくらいなのかも知ることが出来ました。ただ、自分のレベルが低かった事もあり、講義の内容が少し難しく感じました。しかし、講義はとてもためになる内容で、勉強の向上心につながりました。また留学を共にするメンバーと顔合わせをし、友達になる機会にもなりました。
- ・ 留学先で必要な英語だったのでためになったし、ゲーム形式などを取り入れて楽しく学べる場だったのでとても良かったです。
- ・ 終了の時間をもう少し早くしてほしいです。
- ・ 今後も続けてほしい。
- ・ 水曜の13:00とかの方が参加しやすかったと思う。
- ・ 事前にオーストラリアのことについて知れたのは助かった。また、研修の中で日常的に使える英語表現を学べたのも大きかった。
- ・ 留学前に、海外の授業スタイルや自分の意見を強く持つ重要性について学ぶ必要があると感じた。
- ・ 事前研修を14回も行っていただいて、スタッフの皆様、講師の方は大変だったと思います。そして、++大感謝しております。ありがとうございます。もう少し日にちを絞り、自由参加ではなく強制感を出した方が良いと思います。また、実施日時を今回より早めにアナウンスし、留学予定者が日程調整を早めに行える方が参加率は上がると思います。

## 6. 留学生センター年間行事

留学生センターでは年間を通じ、様々な行事を行なってきた。2016年度（2016年4月～2017年3月）の年間行事を一覧にまとめ、主な行事（下線）内容について報告する。

### 2016年

#### 4月

日本社会文化プログラム、日本語研修コース開講式（4月12日）

日本語研修コース授業開始（4月13日）

#### 5月

郡上踊りワークショップ（5月11日）

#### 6月

岐阜大学夏期短期留学（サマースクール（受入））受入開始（6月29日）

#### 7月

ラウンジチューター企画“七夕まつり”（7月6日）

能楽ワークショップ（7月13日）

岐阜大学夏期短期留学（サマースクール（受入））修了式及び歓送会（7月27日）

日本語研修コース授業終了（7月28日）

#### 8月

日本語・日本文化研修留学生論文発表会（8月7日）

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム修了式（8月23日）

#### 10月

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム、日本語研修コース開講式（10月7日）

日本語研修コース授業開始（10月11日）

#### 11月

道の駅明宝 外国人誘客実践調査事業 岐大留学生参画プロジェクト 日帰りモニターツアー（11月27日）

#### 12月

道の駅明宝 外国人誘客実践調査事業 岐大留学生参画プロジェクト 道の駅スタッフ接客研修（12月6日）

ウィンタースクール日本語教育（12月6日～21日）

「十二単の着装と体験～日本の民俗衣装～」特別講義（12月7日）

留学報告会「私達の留学の“真実”」（12月14日）

2017年

1月

ラウンジチューター企画 “日本のお正月”（1月11日）

2月

日本語研修コース授業終了（2月10日）

道の駅明宝 外国人誘客実践調査事業 岐大留学生参画プロジェクト 1泊2日モニターツアー（2月16～17日）

3月

### 6.1 郡上踊りワークショップ

2017年5月11日（水）13：30～15：00、郡上踊りワークショップを実施した。以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<http://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2016/05/entry19-3849.html>

#### 留学生センター 郡上踊りワークショップを開催しました

本学留学生センターは、平成28年5月11日（水）、柳戸会館1階集会ホールにおいて、郷土芸能のひとつであり国重要無形民俗文化財の指定を受けている「郡上踊り」を学ぶワークショップを開催しました。当日は、留学生、日本人学生、教職員約40人が参加しました。このワークショップは、サマースクール（受入）郡上プログラムや本学との地域連携協定の締結などの交流実績がある郡上市との交流促進の一環として実施しているもので、今回で5回目の開催となります。

ワークショップが始まる前に、留学生達は、美濃市の国際交流支援グループ「せびあ会」の方々に浴衣を着付けてもらい、初めて履く下駄で郡上踊りに挑戦しました。色とりどりの浴衣を着た留学生たちは、踊りが始まる前から写真を撮り合って大いに盛り上がりました。

ワークショップには、郡上踊りの本場、郡上市八幡町から遠藤光生氏、熊澤里重氏を講師としてお招きしました。最初に郡上市や郡上踊りの概要についての説明を聞いてから、郡上踊りの中で代表的



な曲の「かわさき」と「春駒」の2曲の踊りを習いました。

最初は緊張で表情や動きの硬い学生もいましたが、すぐに慣れ、楽しそうに曲に合わせて踊る姿が見られました。講師による「優秀踊り子」の選考では、韓国、ス



ウェーデン、中国、マレーシア、ミャンマーの6人の留学生が選ばれ、講師から賞品が手渡されました。また、参加者全員に「参加証」が渡されました。最後に全員で記念写真を撮り、盛況のうちにワークショップを終えました。

## 6.2 岐阜大学サマースクール（受入）

第29回サマースクール（受入）は、従来の体制を以下のように整理・改善し、6月29日（水）～7月28日（木）に実施した。

1) プログラム全体の責任部署がグローバル推進本部であることを再度確認し、実務は同本部の留学基盤教育部門内に設置された「サマースクール（受入）作業部会」が行った。



2) 留学生センターは、サマースクール（受入）の日本語教育と日本文化体験（学外体験を含む）を担当した。



詳細については、留学生センターホームページのサマースクール（受入）ページ、サマースクール（受入）レポート（PDF）を参照されたい。

サマースクール（受入）ページ

[http://www1.gifu-u.ac.jp/~isc/jp/international/summer\\_school/](http://www1.gifu-u.ac.jp/~isc/jp/international/summer_school/)

サマースクール（受入）レポート（PDF）

[http://www.gifu-u.ac.jp/news/international/29\\_ss\\_report.pdf](http://www.gifu-u.ac.jp/news/international/29_ss_report.pdf)

### 6.3 能楽ワークショップ

2017年7月13日（水）13:30~15:30、能楽（能・狂言）ワークショップを実施した（グローバル推進本部共催）。以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<http://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2016/07/entry26-4101.html>

「留学生と日本人学生のための能楽（能・狂言）ワークショップ」を開催しました

本学留学生センターとグローバル推進本部の共催により、7月13日（水）、柳戸会館集会ホールにおいて「留学生と日本人学生のための能楽（能・狂言）ワークショップ」を開催しました。当日はサマースクール参加学生、留学生、日本人学生、教職員、学外一般者等約80名の参加がありました。

能の講師としては、観世流シテ方の味方 團<sup>みかたまとか</sup>先生と田茂井廣道<sup>たもいひろみち</sup>先生、狂言の講師としては、大蔵流狂言方の山口耕道<sup>やまぐちこうどう</sup>先生と茂山良暢<sup>しげやまよしのぶ</sup>先生の4名をお招きしました。

最初に、能の代表的演目のひとつである「石橋<sup>しやつきょう</sup>」が披露されました。先生方の自己紹介の後、能楽の歴史や舞台についての説明や、シリアスな能とコメディの狂言の違いについての話がありました。

次に、能と狂言の面<sup>おもて</sup>が4点示され、角度によって表情が変わる能面に驚きの声や、ユニークな表情を見せる狂言面に笑いがおこりました。

学生たちは、能の泣き方や狂言の大笑いの仕方を習い、謡曲「高砂<sup>たかさご</sup>」では先生から賞賛があるほどの声量で会場を揺るがしました。

狂言「寝音曲<sup>ねおんぎょく</sup>」の鑑賞では、くすくす笑いがやがて会場全体を包み込む大笑いとなり、全身で日本文化を堪能する機会となりました。

ワークショップの最後には、サマースクール参加学生のひとりがモデルとなり、能装束の着付けが行われました。鬘をつけ唐装束を着した美しい姿と、鬼になった迫力ある姿、このふたつの装束が披露されました。

プロの方による本物の日本の文化を間近で見聞きし体験できるこのワークショップは、岐阜大学にとってかけがえのないものと考えます。今回は



学外の方の参加が多かったことも嬉しい成果でした。

今後も、留学生センター及びグローバル推進本部では、日本文化に触れる機会や、その魅力を学内外へ発信する機会を大切に、活動を展開していきます。

#### 6.4 平成28年度第3回ぎふフューチャーセンター「国際交流機会の増加をめざして、郡上の魅力を考えよう」(地域協学センター)

本センターと郡上市は、種々の活動を通して連携・協力しているが、その縁で地域協学センターが郡上市で行ったフューチャーセンターに、留学生センターが協力することとなった。複数の日本語・日本文化研修留学生(日研生)が、全学共通教育科目の「フューチャーセンター入門」を履修していたことも、本センターが協力することになった一因である。同フューチャーセンターは、7月15日(金)に郡上市大和の「古今伝授の里」にて実施された。

留学生センターとして行ったことは、留学生の参加学生募集と、当日のファシリテーター(進行役)担当である。参加留学生は13名(日研生8名、日本語研修コースDクラス4名、全学共通教育日本語授業履修生1名)だったが、「フューチャーセンター入門」履修者以外はすべて留学生センターで声かけした学生たちである。郡上市八幡、同白鳥の国際交流団体や自治体の方々との意見交換の場であったため、日本語で相当のコミュニケーションが可能な留学生に参加が限られ、日研生やDクラスレベルの学生への声かけとなった。

事前・当日ともに、負担が軽かったとは言いがたいが、地域との連携を重視してる留学生センターとして、本行事に協力したことはプラス面のほうが大きかったと考えている。何より、現地での参加留学生たちの生き生きとした様子には、苦勞の飛ぶ思いがした。地域と岐大・岐大留学生をどうつなぐか、引き続き模索していかなければならない。

なお、地域協学センターホームページに本フューチャーセンターの報告が掲載されている。

<http://www.ccsc.gifu-u.ac.jp/ccsc/index/futurecenter/1936>



## 6.5 岐阜大学ウィンタースクール

今年度、第2回のウィンタースクールが行われた（12月5日（月）～22日（木））。ウィンタースクールは、グローバル推進本部の事業で、留学生センターは日本語教育を担当した他、日本文化体験として、書道体験クラスを実施し（12/14水）、本センター主催の十二単の着装と体験（p.60）をウィンタースクールプログラムの一部として提供した。また、地歌舞伎鑑賞と馬籠散策を含む東濃エクスカージョンにも、教員1名が引率として参加した。以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<http://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2016/12/entry14-4552.html>

### 第2回ウィンタースクールが始まりました

グローバル推進本部は、12月5日（月）から12月22日（木）にかけて本学として2回目の実施となるウィンタースクールを開催しています。本年度は、ジョイント・ディグリープログラム（連携する大学間で開設された共同プログラムを修了した際に、複数の大学が共同で単一の学位を授与するもの）の設置を視野に入れて、前年度の実施校のインド工科大学グワハティ校（IITG）に加え、マレーシア国民大学（UKM）からも学生を受け入れています。

本プログラムでは、両校ともに10倍以上の倍率の中から選ばれた計8名の学生が、工学部、応用生物科学部の研究室で研究体験を行います。その他、留学生センターが提供する日本語授業を受講するほか、本学教員、IITG教員、UKM教員による特別講義を受講します。3週間に凝縮された岐阜大学での“留学体験”では、キャンパスライフ以外にも、地域企業での企業見学、学内外で実施される日本文化体験イベントに参加する予定です。

本プログラムを通して、岐阜大学での学生生活を体験してもらうことで、参加学生や本学学生はもとより、両校の教職員にとっても、今後推進すべき国際協働教育のより良い理解と促進につながることを期待しています。

なお、詳細については、ウィンタースクールレポート（PDF）を参照されたい。

[http://www.gifu-u.ac.jp/news/international/winter\\_school\\_2.pdf](http://www.gifu-u.ac.jp/news/international/winter_school_2.pdf)



## 6.6 十二単の着装と体験

2017年12月7日（水）14：00～15：30、十二単の着装と体験を実施した。以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<http://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2016/12/entry20-4560.html>

### 「十二単の着装と体験 ー日本の民族衣装ー」を開催しました

留学生センターは、12月7日（水）、柳戸会館集会室（和室）において、特別講義「十二単の着装と体験 ー日本の民族衣装ー」を開催しました。

当日は、留学生センター所属の日本語・日本文化研修コースの留学生（以下「日研生」）をはじめ、本学に在籍する留学生や日本人学生及び教職員、更に今年度第2回を迎えたウィンタースクールプログラムに参加しているインド工科大学グワハティ校とマレーシア国民大学の学生等約50人が参加しました。

この講義は今年度で3回目となり、「本物にふれる」という留学生センターのコンセプトに基づき、本学の学生を対象とした日本文化の体験型授業の一環として開催したものです。講師は、和服の着付けを専門に指導されている伊藤慶子氏、佐藤千里氏他4名の方々でした。講師の方々は紋付・袴の正装で立ち合わせ、会場に雅楽のBGMが流れる荘厳な雰囲気の中で行われました。

留学生センターの土谷准教授から、日本語・英語両言語で十二単の歴史や基礎知識について説明があったのち、モデル希望者の中から選抜された日研生のシリワット・コッチャコンさん（タイ）が、小袖と袴、化粧の下準備をし、髪に宝冠ほうかんを付けて会場に入室しました。



十二単の着付けでは、講師の先生方は作法に従い、「お方様」かたであるシリワットさんに敬意を表しながら、五衣いつつぎぬ、表着うわぎ、

唐衣からぎぬ、裳もを順に着付けました。

留学生たちは、赤や緑のきらびやかな衣をまとっていき様子に興味深く見入っていました。着付け終了後、十二単に檜扇ひおうぎを持ったシリワットさんを囲む記念撮影の輪ができた。



ました。

十二単は重ねたままスルッと脱げ、脱いだ後も人が座っているように見えます。それを「空蟬うつせみ」といいます。その空蟬の中に男女を問わず学生は次々と入り、重さを実感しました。

本講義は、日本の伝統文化の奥深さ、美しさを堪能することができた有意義なひと時となり、日本文化教育の充実にもつながる画期的なものとなりました。

なお、本講義は、2016年12月9日朝の中日新聞、岐阜新聞でも紹介されています。

## 6.7 道の駅明宝 外国人誘客実践調査事業 岐大留学生参画プロジェクト

岐阜大学留学生センターの2016年度組織目標のひとつは、「郡上市（明宝地域等）との連携など、地域の特長を活かしたプロジェクトの創出について検討する」(組織目標2)であった。その活動・成果について以下述べる。

本センターと郡上市とのつながりは、多方面にわたる。以下が主たるものである。

### 1) サマースクール（受入）郡上プログラム（7月）

1996年度より、3泊4日のホームステイ及び文化体験プログラムを郡上八幡国際友好協会のご協力のもと実施している。

### 2) 郡上踊りワークショップ（5月）

2012年度より、毎年5月に郡上から講師を招聘し実施している。

### 3) 郡上市内観光施設等資料の外国語訳

郡上八幡博覧館、ホテル郡上八幡等の観光施設や、同市内企業の資料の外国語訳を、本センターの仲介により本学留学生が行っている（インドネシア語、タイ語、ベトナム語、韓国語）。

### 4) 地域協学センター平成28年度第3回ぎふフューチャーセンター「国際交流機会の増加をめざして、郡上の魅力を考えよう」(2016年7月15日、古今伝授の里(郡上市大和)にて) (p.58参照)

ホームステイ等で本学留学生が多にお世話になっている郡上市に、何らかの形で恩返しをいと常々考えていたところ、郡上市明宝において、外国人観光客をもっと増やしたいという機運があることを知った。留学生が貢献できることがあるのではないかと試行したのが、前年度（2015年度）の日帰りモニターツアーであった（2016年2月23日、『岐阜大学留学生センター2016』p.95「郡上明宝観光モニターツアー」参照）。かなりの手応えを得、2016年度も継続することとした。

2016年度、郡上市明宝は、農林水産省の「農山漁村おみやげ農畜産物販売促進事業」補

助金の交付を受けた（2016年8月～）。この事業の目的と主な内容は以下の通りである。

目的：訪日外国人による農林水産物の購入促進を図り、おみやげとして持ち帰ること等による新たな需要を創出するため、農山漁村における訪日外国人旅行者の受入体制づくりを推進します。

- 主な内容：① 訪日外国人の農林水産物購入を促進する環境構築  
② 訪日外国人の農林水産物購入促進のために必要な施設改修整備

郡上市明宝は、具体的には、ハード面（道の駅施設改修、Wi-Fi環境整備等）とソフト面（言語対応（ポップ、接客）、道の駅利用者アンケート、周遊プラン検討等）の計画を立て、後者を「道の駅明宝 外国人誘客実践調査事業」とした。参画団体は、郡上市役所明宝振興事務所、明宝ツーリズムネットワークセンター（NPO法人）、学びの森パスカル（コーディネート業務担当）、明宝地域民間企業（明宝マスターズ、めいほうスキー場等）、岐阜大学留学生センターである。

本学留学生が同プロジェクトに参画することには、学生・大学双方にメリットがある。まず学生は、学内では得られない実社会における実践的な経験、大学関係者や友人以外の人々と社会的なつながりを持つ経験ができる。他者の役に立つ（地域に貢献する）充実感も得られるだろう。大学にとっては、本学の目標のひとつである「岐阜大学は、地域に根ざした国際化と成果の地域還元によってグローバル化を実現する。」の体现である。地域への貢献であると同時に、学内では与えられない教育（経験）機会を留学生に提供することができ、この活動によって郡上（岐阜）に対する愛着心が育てば、留学生たちが将来本学に回帰することも期待できる。こうした諸事情及び理由により、補助金交付決定の8月から、今年度の活動を本格的に始動させた。

具体的な活動は、日帰りモニターツアー（11/27）、道の駅スタッフ接客研修（12/6）、周遊プランモニターツアー（2/16-17）の3つであった。以下それぞれについて詳述する。

#### 1）日帰りモニターツアー（11月27日（日））

日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）4名、日本社会文化プログラム履修生1名、工学部所属交換留学生（本センター日本語研修コース履修生）1名、計6名が参加した（韓国2、スウェーデン1、タイ1、中国2）。ツアーに先立ち、明宝からの講師を招いて11月24日（木）に事前準備講義を行い、参加学生は基本的な知識を得た上で当日を迎えた。当日は、道の駅明宝視察、おときご飯（明宝の伝統食を復活させようというイベント）体験、

するすみ

磨墨太鼓（同地域で伝わる和太鼓）体験、アンケート記入という流れであった。

天気に恵まれない日だったが、学生たちは熱心に視察や活動をするとともに、大いに楽しんだ。最後のアンケートは、時間が足りなくなるほどしっかり記入してくれた。彼らのコメントや提案が、今後の明宝の観光振興に資することを期待したい。

## 2) 道の駅スタッフ接客研修（12月6日（火））

平常授業日だったため、留学生センター所属の学生は参加せず、本学の外国人大学院生2名と留学生センター教員1名（土谷）が参加した。明宝サイドの参加者は、道の駅や民宿の関係者約20名であった。コーディネーター高田由香氏（学びの森パスカル）によるインバウンド観光についての講義があったのち、同氏がファシリテーターを務めたワークショップを行った。岐阜県国際交流員の参加もあり、大学という枠を越えた活動に参加できたことは、参加教員にとっても興味深く貴重な体験であった。

## 3) 周遊プランモニターツアー（2月16日（木）～17日（金））

11月に実施した日帰りモニターツアー参加者6名と、工学部所属研究生（本センター日本語研修コース履修生）1名、計7名が参加した（インドネシア1、韓国2、スウェーデン1、タイ1、中国2）。初日は、まず「めいほうスキー場」を訪問し、外国人観光客が同スキー場で経験するであろうことを体験した（ウェアの貸し出し、リフト乗車、昼食、スキーやスノーボードができない観光客のためのアクティビティ）。

その後日本旅館に移動し、浴衣の着付けや共同風呂の利用について説明を受け、実際に各自で行った。今後の観光プランに含められるかを見るために、おにぎり作り、あまごの串刺しといった体験も盛り込んだ。夕食時には、地域の方々が合流し、食事を共にしながら明宝のインバウンド観光について、ざっくばらんに話し合うことができた。

2日目は、当初は各自で明宝エリアを自由散策する予定だったが、悪天候のため全員一緒の行動とし、明宝民族資料館と明宝ハム工場訪問、道の駅明宝への移動となった。道の駅明宝は、11月の日帰りモニターツアーで訪問したが、その後改修がなされており、学生たちは以前の様子との違いに目を光らせていた。ツアーの最後には、参加学生全員に詳細なアンケートを記入してもらい、更に明宝が販売に力を入れているお土産3品（明宝ハム、明宝トマトケチャップ、けいちゃん）について、母語と日本語または英語で紹介文を書いてもらった。

郡上市明宝のインバウンド観光は、まだ端緒についたばかりで、今年度の岐大留学生の活躍が具体的に目に見える形に結実するには時間がかかる。しかし、わずかながら実感できることもあった。道の駅明宝は今年度改修されたが、その重要ポイントのひとつは、無

料 Wi-Fi の設置である。これは、岐大留学生が言ったことだけによるものではないが、彼らが11月のモニターツアーで口々にその重要性を訴えたことは、最後のひと押しになったと言っていいだろう。2月の再訪でスマートフォンを Wi-Fi につなげることを確認した学生たちは満足そうであった。また、その Wi-Fi についての説明を、日・英・中・韓の4言語で準備しているが、その韓国語訳は本プロジェクト参加学生が担当している。今年度関係者一同が試行錯誤して進めた本プロジェクトが、次年度以降何らかの形で継続・展開できれば何よりである。



2016年11月27日(日) 日帰りモニターツアー



2016年12月6日(火) 道の駅スタッフ接客研修



2017年2月16日(木)~17日(金) 周遊プランモニターツアー

## 7. 留学生センター交流ラウンジ

2012年4月、留学生センターに「国際交流ラウンジ」が設置されてから5年になる。ラウンジにはソファやテーブル・椅子を配置したスペースや、教育用パソコン・プリンターが設置されているスペースがあり、また大型ディスプレイも整備されている。本稿では、2016年度にこのラウンジで行われた活動や、利用状況などを報告する。

### 7.1 ラウンジチューター活動

国際交流ラウンジは多目的に活用されているが、中心となるのはラウンジチューター活動である。学期中の平日午後2時45分から4時45分の2時間、数名の日本人学生がチューターとして常駐し、ラウンジにやってくる留学生と日本語で交流する場を提供している。

活動時間内にやってくる留学生の目的は様々だが、日本語クラスの宿題チェックやレポートの添削など、日本語学習に関わる活動を目的とする学生が多い。自主的にラウンジを訪れる学生もいるが、まだうまく日本語が話せない初級レベルの学生は利用を躊躇するという話も聞いていた。そこで、参加のきっかけになればと、日本語授業の一環として、文作宿題は必ずチューターチェックを受けてから提出するよう指示したり、チューターへのインタビュー課題を出したりするなど、ラウンジチューター活動を授業に取り入れる工夫もはじめた。自主的にラウンジを訪れる学生の中では、日本語で楽しく会話することを目的とする者も多く、世間話をしたり、母国と日本の文化の違いなどについて話し合ったりする姿も多くみられた。

毎日のラウンジチューター活動だけでなく、年に二回、ラウンジチューター主催による留学生向けのイベントを開催している。2016年7月6日(水)には「日本の七夕祭り」(参加者21名)、2017年1月11日(水)には「日本のお正月」(参加者35名)をテーマにしたイベントが行われた。七夕イベントでは、墨と筆で願い事を書いた短冊を笹の葉に結び付けたり、ゲームをしたり、日本人学生と留学生との交流が図られた。またお正月イベントでは、書初めを行ったり、日本のお正月の遊びであるカルタ取り、福笑いで楽しんだり、折り紙やけん玉にも挑戦していた。いずれのイベントもラウンジチューターが企画・準備、当日の司会進行など積極的に取り組んでくれたおかげで、留学生も楽しむことができ、また日本文化の一端を知る良い機会となった。

本年度より、学期末毎にラウンジチューターにアンケート調査を実施し、具体的な活動内容、活動日の忙しさや困ったこと、要望や改善点などの質問に答えてもらった。その結果、チューター活動の現状や問題点を知ることができ、よりよい活動を目指すための建設的な提案も得られた。例えば、曜日や時間帯によって訪問する留学生の数に差があること

から、配置日や配置人数を調整したり、チューターからの要望を反映してメモ用紙や電子辞書などを常備したりすることができた。今後もアンケート調査を継続し、問題点の把握と改善に努めていきたい。

## 7.2 ラウンジでのその他の活動

ラウンジチューター活動以外にも、ラウンジは様々なイベントに活用されている。2016年度は、サマースクール（派遣）説明会、サマースクール（受入）チューター説明会、サマースクール（受入）歓迎茶話会、日本語研修コースクラス発表、個人チューターの指導等が行われた。またラウンジは留学生の生活相談、日本人学生の海外留学についての相談窓口にもなっている。留学や学術交流協定校に関する資料、留学経験者の報告書もあり、留学に関する情報収集をすることもできる。ラウンジの壁面には留学生センターで行われた様々なイベントの写真や、サマースクール（派遣）参加学生が留学報告会用に作成したポスターなどを掲示している。

## 7.3 ラウンジの利用者数

ラウンジがどのくらい利用されているのかを把握するため、のべ利用者数をまとめている（表1）。今年度の利用状況を見ると、例年よりかなり減少しているようにみえるが、今年度からラウンジチューターイベント（七夕まつり、お正月イベント）の参加者を除いた数となっているためである。とはいえ、減少の傾向にあることに変わりはない。

さらに本年度から、利用目的別（チューター活動参加、パソコン利用、相談・問い合わせ

表1. ラウンジの利用状況（チューター配置時のみ。利用者数には日本人学生含む）

年度	前期配置期間と利用者数	後期配置期間と利用者数	合計
2016	4月18日～7月28日 209人(金曜日は閉室)	10月11日～2月10日 348人	557人
2015	4月13日～7月31日 354人(金曜日は閉室)	10月12日～2月4日 301人	655人
2014	4月14日～7月31日 543人	10月14日～2月10日 438人	981人
2013	4月15日～8月2日 420人	10月10日～2月7日 333人	753人
2012	5月28日～8月3日 310人	10月10日～2月8日 558人	868人

せ、資料閲覧、その他)にラウンジ訪問者数も調査した。大まかな人数の把握でしかないが、ラウンジに設置してあるパソコンやプリンターを使用する目的で来訪する留学生が増えてきたことがわかった。

2017年4月の留学生センター移転(地域科学部・共通教育棟4階)に伴い、国際交流ラウンジの場所も変更している。まずは場所を、そして活動内容を周知できるよう、広報活動も工夫し、広く活用されるラウンジを目指していきたい。



七夕まつり



ラウンジチューター



お正月イベント(書初め)



お正月イベント(カルタ・福笑い)

岐阜大学外国人留学生数（在籍別）

平成29年3月7日 現在

研究科・学部等 在籍身分	教育研究科 教育学部		地域科学部 地域科学部		医学研究科 医学部		工学研究科 工学部		応用生物科学 研究科 応用生物科学部		連合農学 研究科		連合獣医学 研究科		連合創薬 医療情報研究科		留学生 センター		計			男女 別合計	合計	
	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	政府 派遣			私 費
学部																				1	8	20	29	47
大学院（修士課程）	1	2	1	5			1	1	1	1	1									0	9	9	18	
大学院（博士課程）		1		11			1	1	1	4	14									5	1	40	46	98
研究生	1				2		4	4	3	1	8	6	15	17	2	3				29	5	36	70	128
特別聴講学生	1	4					2													17	3	38	58	
特別研究学生																				3	0	25	28	54
科目等履修生																				1	0	25	26	
日本語・日本文化研修生																				0	0	3	3	12
小計	2	2	1	22	2		6	8	11	57	1	18	17	2	3				1	38	13	136	187	350
合計	4	11	23	30	8		76	41	25	25	24	22	16	3					187	163			350	

上段は男性、下段（網掛）は、女性を示す





岐阜大学留学生センター紀要 2016

執 筆 者

橋	本	慎	吾	留学生センター教授
村	田	志	保	留学生センター非常勤講師

編 集 委 員

森	田	晃	一	留学生センター長（編集委員長）
橋	本	慎	吾	留学生センター教授
土	谷	桃	子	留学生センター准教授
吉	成	祐	子	留学生センター准教授

岐阜大学留学生センター紀要 2016

2017年7月発行

岐阜市柳戸1番1

編集兼  
発行者 岐阜大学留学生センター  
責任者 森 田 晃 一

印刷所 西濃印刷株式会社  
岐阜市七軒町15番地

**Bulletin of the International Student Center**  
**Gifu University**  
**2016**

<b>Preface :</b> MORITA Kochi .....	1
<b>1. Research Notes</b>	
HASHIMOTO Shingo	
The Acoustic Difference between the Same Utterances Spoken by Japanese Learners to Express the Difference in Two Situations: Based on Making Conversation Task in the Class of Japanese Students and Foreign Students.....	3
MURATA Shiho	
Meaning Classification about Nouns with Prefix <i>O</i> in Contemporary Japanese .....	11
<b>2. Annual Report (2016.4-2017.3)</b>	

*Published by*  
*The International Student Center*  
*Gifu University, Gifu 501-1193, Japan*